

たけくらべ

樋口一葉

青空文庫

(一)

まわ 廻れば 大門おほもんの見返り柳いと長ながけれど、お齒はぐる溝どぶに燈火ともしびうつ
 る三階がいの騒さわぎも手てに取とる如ごとく、明あけくれなしの車くるまの行來ゆきにはかり
 知られぬ全盛ぜんせいをうらなひて、大音寺前だいおんじまへと名なは佛ほとけくさけれど、
 さりとは陽氣ようきの町まちと住すみたる人ひとの申まをしき、三島神社みしまじんじやの角かどをまがり
 てより是れぞと見みゆる大厦いゑもなく、かたぶく軒端のきばの十軒長屋けんながや二十
 軒長屋けんながや、商あきなひはかつつ利きかぬ處ところとて半なかさしたる雨戸あまどの外そとに、あ
 やしき形なりに紙かみを切きりなして、胡粉ごふんぬりくり彩色さいしきのある田樂でんがくみ
 るやう、裏うらにはりたる串くしのさまをかし、一軒けんならず二軒けんならず、

あさひ 朝日に干して夕日に仕舞ふ手當こと／＼しく、一家内これにかゝ
 りて夫れは何ぞと問ふに、知らずや霜月西の日例の神社に欲
 くふかさま 深様のかつき給ふ是れぞ熊手の下ごしらへといふ、正月門
 どまつ 松とりすつるよりかゝりて、一年うち通しの夫れは誠の商賣
 いにん 人、片手わざにも夏より手足を色どりて、新年着の支度もこれ
 をば當てぞかし、南無や大鳥大明神、買ふ人にさへ大福を
 あたへ給へば製造もとの我等萬倍の利益をと人ごとに言ふめ
 れど、さりとは思ひのほかなるもの、此あたりに大長者のう
 わさも聞かざりき、住む人の多くは廓者にて良人は小格子の
 なに 何とやら、下足札そろへてがらんがらんの音もいそがしや夕
 れ 暮より羽織引かけて立出れば、うしろに切火打かくる女房

の顔かほもこれが見納みおさめか十人にんぎりの側そば杖づえ無理情死むりしんぢうのしそこね、
 恨うらみはかゝる身みのはて危あやふく、すはと言いは命いのちがけの勤つとめに遊山ゆきん
 らしく見みゆるもをか、娘むすめは大おほまがき籬しの下した新造しんぞとやら、七軒けんの
 何屋なにやが客きやく廻まわしとやら、提燈かんぼんさげてちよこちよこ走ばしりの修しゆげ
 業う、卒業そつげうして何なににかなる、とかくは檜舞臺ひのきぶたいと見たみつるもを
 かしからずや、垢ぬけあかのせし三十あまりの年増としま、小ざつぱりとせ
 し唐棧とうざんぞろひに紺足袋こんたびはきて、雪駄せつたちやらく忙いそがしげに横抱よこだ
 きこづの小包こづみはとはでもしるし、茶屋ちやが棧橋ざんぼしとんと沙汰さたして、廻まわ
 り遠とほや此處こゝからあげまする、誂あつらへ物の仕事しごとやさんと此このあたりには
 言いふぞかし、一體たいの風俗ふうぞくよそと變かはりて女子おなごの後うしろ帯おびきちちんと
 せし人ひと少すくなく、がらを好このみて巾廣はびひろの卷帶まきおび、年増としまはまだよし、

十五六の小癩こしやくなるが酸漿ほうづきふくんで此姿このなりはと目をふさぐ人も
 あるべし、所ところがら是非ぜひもなや、昨日河岸店きのふかしみせに何なにむらさき紫げんじなみの源氏名耳
 に残のこれど、けふは地廻りぢまわの吉きちと手馴てなれぬ焼鳥やきとりの夜店よみせを出だして、
 身代しんだいたゞ骨ほねになれば再び古巢ふたゝふるすへの内儀姿かみさますがた、どこやら素しろう
 人とよりは見みよげに覺おぼえて、これに染そまらぬ子供こどももなし、秋あきは九
 月ぐわつ仁和賀わかの頃ころの大路おほぢを見給みたまへ、さりとは宜よくも學まなびし露ろ八はちが物眞ものま
 似まね、榮喜えいきが處作しよさ、孟子もうしの母はやおどろかん上じようたつ達の速すみやかさ、う
 まいと褒ほめられて今宵こよひも一廻りまわと生意氣なまいきは七つ八つよりつりて、
 やがては肩かたに置手おきてぬぐひ、鼻歌はなうたのそゝり節ぶし、十五じゆの少年せうねんがま
 せかた恐おそろし、學校がくかうの唱歌しようかにもぎつちよんちよんと拍子ひやうしを
 取りとて、運動會うんどうくわいに木きやり音頭おんどもなしかねまじき風情ふぜい、さらで

も教きやう育いくはむづかしきに教師きやうしの苦心くしんさこそと思おもはるゝ入谷いりやぢ
 かくに育英いくえい舎しやとて、私立しりつなれども生徒せいとの數かずは千人にんちか近く、狹せまき校か
 舎うしやに目白めじろ押おしの窮きうくつ屈くつさも教師きやうしが人望じんぼういよくあらはれて、
 たがくこう唯學校たがくこと一ト口くちにて此このあたりには吞込のみこみのつくほど成なるがあり、
 かよこども通ふ子供かぞの數かず々に或あるひ火消ひけし鳶とび人足にんそく、おとつさんは刎橋はねばしの番ばん
 屋んやに居ゐるよと習ならはずして知しる其道そのみちのかしこさ、梯子はしごのりのまね
 びにアレしの忍しのびがへしを折おりりましたと訴うつたへのつべこべ、三百びやくといふ
 代だい言げんの子こもあるべし、お前まへの父とさんは馬うまだねへと言いはれて、名な
 のりや愁つらき子こ心ころにも顔かほあからめるしほらしさ、出で入いりの貸い座ざ
 敷ゑの祕藏ひざう息むす子こ寮住居りやうずまひに華族くわぞくさまを氣取きどりて、ふさ付つき帽子ぼうし面おも
 もちゆたかに洋服ようふくかるゝと花々はな敷しきを、坊ぼつちやん坊ぼつちやんと

て此子の追従するもをかし、多くの中に龍華寺の信如とて、
 千筋となづる黒髪も今いく歳のさかりにか、やがては墨染に
 かへぬべき袖の色、發心は腹からか、坊は親ゆづりの勉強
 ものあり、性來をとなしきを友達いぶせく思ひて、さま／＼
 の悪戯をしかけ、猫の死骸を繩にくゝりてお役目なれば引
 導をたのみますと投げつけし事も有りしが、それは昔、今は校
 内一人の人とて假にも侮りての處業はなかりき、歳は十五、並
 背にいていが栗の頭髮も思ひなしか俗とは變りて、藤本信如
 と訓にてすませど、何處やら釋といひたげの素振なり。

八月廿日は千束神社のまつりとて、山車屋臺に町々の見得
 をはりて土手をのぼりて廓内までも入込まんづ勢ひ、若者が氣
 組み思ひやるべし、聞かぢりに子供とて由斷のなりがたき此あた
 りのなれば、そろひの浴衣は言はでものこと、銘々に申合
 せて生意氣のありたけ、聞かば膽もつぶれぬべし、横町組と自
 らゆるしたる亂暴の子供大將に頭の長とて歳も十六、仁和
 賀の金棒に親父の代理をつとめしより氣位ゑらく成りて、帶
 は腰の先に、返事は鼻の先にていふ物と定め、にくらしき風俗、
 あれが頭の子でなくばと鳶人足が女房の蔭口に聞えぬ、
 心一ぱいに我がまゝを徹して身に合はぬ巾をも廣げしが、表

町ちに田た中屋なかやの正しょう太郎たらうとて歳としは我われに三みつつ劣おとれど、家いへに金かねあり
 身みに愛あい嬌けうあれば人ひとも憎にくまぬ當たうの敵かたきあり、我われは私しり立りつの學がく校かう
 へ通かよひしを、先さき方は公こう立りつなりとて同おなじ唱しよう歌かも本ほん家けのやうな顔とほ
 をしおる、去こ年ぞも一おと昨とし年さきも先おと方なには大おと人なの末まつ社しやがつきて、まっ
 りの趣しゆう向こうも我われよりは花はなを咲さかせ、喧けん嘩くわに手て出だしのなりがた
 き仕しく組くみも有ありき、今こと年また又またもや負まけにならば、誰だれだと思おもふ横よこ
 町うの長ちやう吉きちだぞと平つ常ねの力ちからだては空からいばりとけなされて、辨べん
 天てんぼりに水みづおよぎの折をりも我わが組くみに成なる人ひとは多おほかるまじ、力ちからを言い
 はゞ我わが方ほうがつよけれど、田た中屋なかやが柔おと和なぶりにごまかされて、
 一つは學がく問もんが出で來きおるを恐おそれ、我わが横よこ町ちゆう組くみの太た郎らう吉きち、三さん五ご郎らう
 など、内ない々くは彼あちらちがたに成なるも口くち惜をし、まつりは明あ後さつ日て、い

よく、我が方が負け色と見えたらば、破れかぶれに暴れて暴れて、
 正太郎が面に疵一つ、我れも片眼片足なきものと思へば爲や
 すし、加擔人は車屋の丑に元結よりの文、手遊屋の彌助な
 どあらば引けは取るまじ、おゝ夫よりは彼の人の事彼の人の事、
 藤本のならば宜き智恵も貸してくれんと、十八日の暮れちかく、
 物いへば眼口にうるさき蚊を拂ひて竹村しげき龍華寺の庭先
 から信如が部屋へのそりのそりと、信さん居るか顔を出しぬ。
 己れの爲る事は亂暴だと人がいふ、亂暴かも知れないが口惜
 しい事は口惜しいや、なあ聞いてくれ信さん、去年も己れが處の
 末弟の奴と正太郎組の短小野郎と萬燈のたゝき合ひから始
 まつて、夫れといふと奴の中間がばらばらと飛出しやあがつて、

どうだらうちい小さな者の萬燈まんどうを打うちこわしちまつて、胴揚どうあげにしや
 がつて、見みやがれ横町よこちょうのざまをと一人にんがいふと、間拔まぬけに背せのた
 かい大人おとなのやうな面つらをして居ゐる團子屋だんごやの頓馬とんまが、頭かしらもあるものか
 尻尾しっぽだ尻尾しっぽだ、豚ぶたの尻尾しっぽだなんて悪あく口こうを言いつたとさ、己おらあ其そ
のとき時千束ぞくさま様へねり込んで居ゐたもんだから、あとで聞きいた時ときに直す
ぐさまし様仕かへしに行ゆかうと言いつたら、親父とつさんに頭あたまから小言こごとを喰くつ
そのときて其時なきねいりも泣寝入おとし、一昨年まへはそらね、お前まへも知しつてる通とほり筆屋ふでや
みせの店おもてまちへ表町わかいしゆの若衆よりあつが寄合ちやばんて茶番なにか何かやつたらう、
ときおあの時よこちょう己よこちょういらが見みに行いつたら、横町よこちょうは横町よこちょうの趣向しゆかうがありませ
 うなんて、おつな事ことを言いひやがつて、正太しやうたばかり客きやくにしたのも
むね胸むねにあるわな、いくら金かねが有あるとつて質屋しちやのくづれの高利貸かうりかしが

何たら様だ、彼んな奴を生して置くより擲きころす方が世間のた
 めだ、己らあ今度のまつりには如何しても亂暴に仕掛けて取かへ
 しを付けようと思ふよ、だから信さん友達がひに、夫れはお前
 が嫌やだといふのも知れてるけれども何卒我れの肩を持つて、横
 町組の耻すゝぐのだから、ね、おい、本家本元の唱歌だな
 んて威張りおる正太郎を取ちめて呉れないか、我れが私立の寢
 ぼけ生徒といはれゝばお前の事も同然だから、後生だ、どうぞ、
 助けると思つて大萬燈を振廻しておくれ、己れは心から底か
 ら口惜しくつて、今度負けたら長吉の立端は無いと無茶にく
 やしがつて大幅の肩をゆすりぬ。だつて僕は弱いもの。弱くて
 も宜いよ。万燈は振廻せないよ。振廻さなくても宜いよ。

僕ぼくが這入はいると負まけるが宜いいかへ。負まけても宜いいのさ、夫それは仕方しかた
 が無ないと諦あきらめるから、お前まへは何なにも爲しないで宜いいから唯横町たゞよこちょうの組ぐみ
 だといふ名なで、威張あばつてさへ呉くれると豪氣がうぎに人氣じんきがつくからね、
 お己おれは此様こんな無學漢わからづやだのにお前まへは學ものが出來できるからね、向むかふの奴やつ
 が漢語かんごか何かなにで冷語ひやかしでも言いつたら、此方こつちも漢語かんごで仕しかへしてお
 くれ、あゝ好いい心こゝろ持もちださつぱりしたお前まへが承知しょうちをしてくれ、
 ば最もう千人にんりき力ちからだ、信のぶさん有ありがたうと常つねに無ない優やさしき言葉ことばも出いで
 ものなり。

一人にんは三尺帶じやおびに突つかけ草履ぞうりの仕事師しごとしの息子むすこ、一人にんはかわ色金巾いろかなきん
 の羽織はをりに紫むらさきの兵子帶へこおびといふ坊様ぼうさま仕立したて、思おもふ事ことはうらはらに、話はな
 しは常つねに喰くひ違ちがひがちなれど、長ちやうきち吉きちは我わが門前もんぜんに産聲うぶごゑを

揚げしものと、大和尚夫婦が鼻肩もあり、同じ學校へかよへば
 私立私立とけなされるも心わるきに、元來愛敬のなき長
 吉なれば心から味方につく者もなき憐れさ、先方は町内の若
 衆どもまで尻押をして、ひがみでは無し長吉が負けを
 取る事罪は田中屋がたに少なからず、見かけて頼まれし義理とし
 ても嫌やとは言ひかねて信如、夫れではお前の組に成るさ、成
 るといつたら嘘は無いが、成るべく喧嘩は爲ぬ方が勝だよ、い
 よく先方が賣りに出たら仕方が無い、何いざと言へば田中の正
 太郎位小指の先さと、我が力の無いは忘れて、信如は机の
 引出しから京都みやげに貰ひたる、小鍛冶の小刀を取出して
 見すれば、よく利れそうだねへと覗き込む長吉が顔、あぶな

し此物を振廻してなる事か。

(三)

解かば足にもとゞくべき毛髪を、根あがり堅くつめて前髪大
 きく鬘おもたげの、赭熊といふ名は恐ろしけれど、此鬘を此
 頃の流行とて良家の令嬢も遊ばさるゝぞかし、色白に鼻
 筋とほりて、口もとほ小さからねど締りたれば醜くからず、一
 つ一つに取たてゝは美人の鑑に遠けれど、物いふ聲の細く清しき、
 人を見る目の愛嬌あふれて、身のこなしの活々したるは快き
 物なり、柿色に蝶鳥を染めたる大形の浴衣きて、黒襦子

と染分絞りの晝夜帶胸だかに、足にはぬり木履こゝらあたり
そめわけしほ ちうやおびむね あし
 にも多くは見かけぬ高きをはきて、朝湯の歸りに首筋白々
おほ み たか あさゆ かへ くびすぢしろ／＼
 と手拭さげたる立姿を、今年の後に見たしと廓がへりの
てぬぐひ たちすがた いま ねん のち み くるわ
 わかものまをし、大黒屋の美登利とて生國は紀州、言葉のいさゝ
若者は申き、 だいこくや みどり せいこく きしう ことば
 か訛れるも可愛く、第一は切れ離れよき氣象を喜ばぬ人なし、
なま かわゆ だい き はな きしやう よろこ ひと
 子供に似合ぬ銀貨入れの重きも道理、姉なる人が全盛の餘波、
こども にはは ぎんくわ い おも だうり あね ひと ぜんせい なごり
 延いては遣手新造が姉への世辭にも、美いちやん人形をお買ひ
ひ やりてしんぞ あね せじ み じんげう か
 なされ、これはほんの手鞠代と、呉れるに恩を着せねば貰ふ身
あり おほ てまりだい く おん き もら み
 の有がたくも覺えず、まくはまくは、同級の女生徒二十人に
そろ まり あた どうきう ちよせいと にん
 揃ひのごむ鞠を與へしはおろかの事、馴染の筆やに店ざらしの手
あそび かひ よろこ こと なじみ ふで たな て
 遊を買しめて、喜ばせし事もあり、さりとは日々夜々の散
あそび かひ よろこ こと なじみ ふで たな て

財い此このとし歳このとしこの身分みぶんにて叶かなふべきにあらざ、末すゑは何なにとなる身みぞ、
 兩れうしん親おほめありながら大目おほめに見みてあらしき詞ことばをかけたる事ことも無く、樓ろうの
 主あるじが大切たいせつがる様子さまも怪あやしきに、聞きけば養やうぢよ女よにもあらず親しんせき戚せき
 にてはもとより無く、姉あねなる人ひとが身賣みうりの當時たうじ、鑑めき定きに來きたりし
 樓ろうの主あるじが誘さそひにまかせ、此このち地ちに活計たつきもとむとて親おや子こ三人みたりが旅たびごろ
 衣も、たち出いでしは此このわけ譯わけ、それより奥おくは何なになれや、今いまは寮りようのあづ
 かりをして母ははは遊ゆうぢよ女よの仕立物したてもの、父ちちは小格子こがうしの書記しよきに成なりぬ、
 此このみ身みは遊ゆうげい藝い手しゆげい藝い學校がくかうにも通かよはせられて、其そのほうは心こころのまゝ、
 半はん日にちは姉あねの部屋へや、半はん日にちは町まちに遊あそんで見聞みきくは三味さみに太鼓たいこにあ
 りむらさき紫むらさきのなり形かたち、はじめ藤色ふぢいろ絞しぼりの半襟はんゑりを袷あはせにかけて着きて歩あ
 きしに、田舎物いなかもいなか者と町内てうないの娘むすめどもに笑わらはれしを口惜くやし

がりて、三日三夜泣きつゞけし事も有しが、今は我れより一人
 々々を嘲りて、野暮な姿と打つけの悪まれ口を、言ひ返すものも
 無く成りぬ。二十日はお祭りなれば心一ぱい面白く事をしてと
 友達ともだちのせがむに、趣向しゆくこうは何なりと各自めいめいに工夫くふうして大勢おほぜいの
 好い事ことが好いでは無いか、幾金いくらでもいゝ私わたしが出すからとて例れいの通とほ
 り勘定かんでうなしの引受けひきうに、子供中間こどもなかまの女王様にやわうさま又とあるまじき
 恵みめぐみは大人おとなよりも利ききが早く、茶番ちやばんにしよう、何處どこのか店みせを借か
 りて往來わうらいから見みえるやうにしてと一人ひとりが言いへば、馬鹿ばかを言いへ、
 夫それよりはお神輿みこしをこしらへてお呉くれな、蒲田屋かばたやの奥おくに飾かざつてあ
 るやうな本當ほんたうのを、重おもくても構かまはしない、やつちよいやつちよ
 い譯わけなしだと捻ねぢ鉢巻はちまきする男子をとこのそばから、夫それでは私わたしたちが

つま 詰らない、皆みんなが騒さわぐを見るみるばかりでは美登利みどりさんだとて面白おもしろく
 はあるまい、何なんでもお前まへの好いい物ものにおしよと、女おんなの一いむれは祭まつり
 を抜ぬきに常盤座ときはざをと、言いいたげの口振くちぶりをかし、田中たなかの正太しょうたは
 可愛かわいらしい眼めをぐるぐると動うごかして、幻燈げんとうにしなにか、幻燈げんとう
 に、己おれの處ところにも少すこしは有あるし、足たりりないのを美登利みどりさんに買かつ
 て貰もらつて、筆ふでやの店みせで行やらうでは無ないか、己おれが映うつし人てで横よこちや
 町うの三五郎ろうに口上こうじょうを言いはせよう、美登利みどりさん夫それにしな
 かと言いへば、あゝ夫それは面白おもしろからう、三さんちやんの口上こうじょうなら
 ば誰だれも笑わらはずには居ゐられまい、序ついでにあの顔かほがうつると猶なほおもし
 ろいと相談さうだんはとゝのひて、不足ふそくの品しなを正太しょうたが買物かひもの役やく、汗あせに
 成なりて飛とび廻まわるもをかし、いよく明日あすと成なりては横町よこちやうまでも

其沙汰聞えぬ。
そのさたきこ

(四)

打つや鼓のしらべ、三味の音色に事かゝぬ場處も、祭りは別物、
うつつみ さみ ねいろ こと ばしよ まつ べつもの
とり いち の ねん ど にぎは をのてる
 西の市を除けては一年一度の賑ひぞかし、三島さま小野照さま、
とたり ま きそ こゝろ よこてう おもて そろ おな
 お隣社づから負けまじの競ひ心をかしく、横町も表も揃ひは同
まおかもめん ちやうめう こぞ よ かた
 じ眞岡木綿に町名くづしを、去歳よりは好からぬ形をつぶや
あ くち そめ あさ な ふと この
 くも有りし、口なし染の麻だすき成るほど太きを好みて、十四五
い か だるま みづく いぬ こ てあそび
 より以下なるは、達磨、木兔、犬はり子、さま／＼の手遊
かずおほ み ゑ おほす
 を數多きほど見得にして、七つ九つ十一つくるもあり、大鈴

小鈴背中にがらつかせて、驅け出す足袋はだしの勇ましく可笑し、
 群れを離れて田中の正太が赤筋入りの印半天、色白の首
 筋に紺の腹がけ、さりとは見なれぬ扮粧とおもふに、しごい
 て締めし帯の水淺黄も、見よや縮緬の上染、襟の印のあ
 がりも際立て、うしろ鉢巻きに山車の花一枝、革緒の雪駄おと
 のみはすれど、馬鹿ばやしの中間には入らざりき、夜宮は事なく
 過ぎて今日一日の日も夕ぐれ、筆やが店に寄合しは十二人、一人
 かけたる美登利が夕化粧の長さに、未だか未だかと正太は門
 へ出つ入りつして、呼んで来い三五郎、お前はまだ大黒屋の寮
 へ行つた事があるまい、庭先から美登利さんと言へば聞える筈
 早く、早くと言ふに、夫れならば己れが呼んで来る、萬燈は此

處へあづけて行けば誰れも蠟燭ぬすむまい、正太さん番をた
 のむとあるに、吝嗇な奴め、其手間で早く行けと我が年したに叱
 かられて、おつと來たさの次郎左衛門、今の間とかけ出して韋駄
 天とはこれをや、あれ彼の飛びやうが可笑しいとて見送りし女子
 どもの笑ふも無理ならず、横ぶとりして背ひく、頭の形は才
 槌とて首みぢかく、振むけての面を見れば出額の獅子鼻、反
 齒の三五郎といふ仇名おもふべし、色は論なく黒きに感心なは
 め目つき何處までもおどけて兩の頬に笑くぼの愛敬、目かくしの
 福笑ひに見るやうな眉のつき方も、さりとはをかく罪の無き
 子なり、貧なれや阿波ちぢみの筒袖、己れは揃ひが間に合はな
 んだと知らぬ友には言ふぞかし、我れを頭に六人の子供を、養ふ

親おやも轅かぢらぼう棒ぼうにすぐる身みなり、五十軒けんによき得意場とくいばは持もちたりとも、

内ない證しょうの車くるまは商しょう賣ばいもの、外ほかなれば詮せんなく、十三じゅうさんになれば片か

腕たうでと一昨年おととしより並木なみきの活版所かつばんじよへも通かよひしが、怠惰なまけものなれば

十とうか日の辛しん棒ぼうつゞかず、一つき月おなしよくと同じ職なも無なくて霜しも月つきより春はるへ

かけては突羽根つくばねの内ない職しよく、夏なつは検査場けんさばの水屋こほりやが手傳てつだひして、

呼よび聲こゑをかしく客きやくを引ひくに上じやう手ずなれば、人ひとには調法てうほうがられぬ、

去年こぞは仁和賀にわかの臺だい引ひきに出いでしより、友とも達だちいやしがりて萬年まんねん

町うの呼名よび今いまに残のこれども、三五郎らうといへば滑稽者おどけものと承知しやうちして憎にく

くむ者の無ものきも一徳とくなりし、田中屋たなかやは我わが命いのちの綱つな、親子おやこが蒙かうむる

御恩ごおんすくなからず、日歩ひぶとかや言いひて利金安りきんやすからぬ借かりなれど、

これなくてはの金主様きんしゆさまあだには思おもふべしや、三公こうお己おれが町まちへ遊あそ

びに來いと呼ばれて嫌やとは言はれぬ義理あり、されども我れは
 横町に生れて横町に育ちたる身、住む地處に龍華寺のもの、
 家主が長吉が親なれば、表むき彼方に背く事かなはず、内
 々に此方の用をたして、にらまるゝ時の役廻りつらし。正
 太は筆やの店へ腰をかけて、待つ間のつれ／＼に忍ぶ戀路を
 小聲にうたへば、あれ由斷がならぬと内儀さまに笑はれて、何が
 なしに耳の根あかく、まちくないの高聲に皆も來いと呼つれて
 おもてか 表へ駆け出す出合頭、正太は夕飯なぜ喰べぬ、遊びに耄け
 て先刻にから呼ぶをも知らぬか、誰様も又のちほど遊ばせて下さ
 れ、これは御世話と筆やの妻にも挨拶して、祖母が自からの迎
 ひに正太いやが言はれず、其まゝ連れて歸らるゝあとは俄かに

淋しく、人數は左のみ變らねど彼の子が見えねば大人までも寂しい、馬鹿さわぎもせねば串談も三ちやんの様では無けれど、人好きのするは金持の息子さんに珍らしい愛敬、何と御覽じたか田中屋の後家さまがいやらしさを、あれで年は六十四、白粉をつけぬがめつけ物なれど丸鬚の大きさ、猫なで聲して人の死ぬをも構はず、大方臨終は金と情死なさるやら、夫れでも此方どもの頭の上らぬは彼の物の御威光、さりとは欲しや、廓内の大きい樓にも大分の貸付があるらう聞きましてと、大路に立ちて二三人の女房よその財産を數へぬ。

待^まつ身^みにつらき夜^よ半^はの置^お炬^き燧^{たつ}、それ^こは戀^ひぞかし、吹^ふ風^{かぜ}すゞし
 き夏^{なつ}の夕^{ゆふ}ぐれ、ひるの暑^{あつ}さを風^{ふう}呂^ろに流^{なが}して、身^みじまいの姿^{すがた}見^み、
 母^は親^{おや}が手^てづからそゞけ髪^{がみ}つくろひて、我^わが子^こながら美^うくしきを
 立^たちて見^み、居^ゐて見^み、首^{くび}筋^{すぢ}が薄^{うす}かつたと猶^{なほ}ぞいひける、單^{ひと}衣^へは水^み
 色^づ友^{いう}仙^{せん}の涼^{すず}しげに、白^{しら}茶^ち金^{やきん}らん丸^{まる}帶^{おび}少^{すこ}し幅^はの狭^{せま}いを結^{むす}
 ばせて、庭^{には}石^{いし}に下^げ駄^だ直^{なほ}すまで時^{とき}は移^{うつ}りぬ。まだかまだかと堀^への
 廻^{まわ}りを七^た度^{まわ}び廻^{まわ}り、欠^あくび^かずの數^{かず}も盡^つきて、拂^はふとすれど名^{めい}物^{ぶつ}の蚊^か
 に首^{くび}筋^{すぢ}額^{たい}ぎわしたゞか螫^され、三^ら五^う郎^{まわ}弱^{よわ}りきる時^{とき}、美^み登^{どり}利^り立^{たち}出^いで、
 いぎと言^いふに、此^こ方^{なた}は言^{こと}葉^はもなく袖^{そで}を捉^{とら}へて驅^かけ出^だせば、息^{いき}がは
 づむ、胸^{むね}が痛^{いた}い、そん^いなに急^{いそ}ぐならば此^こ方^ちは知^しらぬ、お前^{まへ}一人^{ひとり}で

お出いでと怒おこられて、別わかれ別わかれの到とうちやく着ふで、筆みせやの店きへ來ときし時しょうは正しやう
 太たが夕ゆふめし飯もなかの最もなか中もなかとおぼえし。あゝ面おも白しろくない、おもしろく
 ない、彼あのひと人ひとが來こなければ幻げんとう燈とうをはじめるのも嫌いや、伯おぼ母ぼさん此こ
 處ゝのうち家うちに智ち惠ゑの板いたは賣うりませぬか、十六武藏むさしでも何なんでもよい、手て
 が暇ひまで困こまると美み登どり利りの淋さびしがれば、夫それよと即そく坐ざに鉢はを借かりて女お
なご子ごづれは切きりぬ抜ぬきにかゝる、男をとこは三五郎ちやうを中なかに仁に和わ賀かのさらひ、北ほ
くくわくぜん全ぜん盛せい見みわたせば、軒のきは提ちやう燈ちん電き氣き燈とう、いつも賑にぎふ五ご丁て町まち、
もろ諸しよ聲こゑをかしくはやし立たつるに、記おぼえ憶えのよければ去こ年ぞ一おと昨とし年しと
 さかのぼりて、手て振ぶり手て拍びやう子うしひとつも變かはる事ことなし、うかれ立たちたる
にん十じゆ人にんあまりの騒さわぎなれば何なに事ごとと門かどに立たちちて人ひと垣がきをつくりし中なか
 より。三五郎ちやうは居あるか、一ちよつ寸と來きてくれ大おほ急いぎだと、文ぶん次じといふ

元結よりの呼よぶに、何なんの用意よういもなくおいしよ、よし來きたと身みがるに
 敷居しきゐを飛とびこゆる時とき、此この二夕股野郎覺悟またやらうかくごをしる、横町よこてうの面つらよごし
 め唯たゞは置おかぬ、誰だれだと思おもふ長ちようきち吉なまだ生なまふぎけた眞似まねをして後こうく
 悔わいするなと頬骨ほほほね一撃うち、あつと魂消たまげて逃入にげいる襟えりがみを、つかん
 で引出ひきだす横町よこてうの一むれ、それ三五郎らうをたゞき殺ころせ、正太しようたを引ひ
 出きだしてやつて仕舞しまへ、弱虫よはむしにげるな、團子屋だんごやの頓馬とんまも唯たゞは置おか
 と潮うしほのやうに沸わきかへる騒さわぎ、筆屋ふでやが軒のきの掛提燈かけちようちんは苦くもなくたゞ
 き落おとされて、釣つりらんぷ危あぶなし店先みせさきの喧嘩けんくわなりませぬと女にようほ
 房うが喚わめきも聞きかばこそ、人數にんずは大凡おほよそ十四五人にん、ねぢ鉢巻はちまきに大
 萬燈まんどうふりたてゝ、當あたるがまゝの亂暴狼藉らんぼうらうぜき、土足どそくに踏ふみこ込こむ傍ぼう
 若無じやくぶじん人、目めざす敵かたきの正太しようたが見みえねば、何處どこへ隠かくした、何處どこ

へ逃げた、さあ言はぬか、言はぬか、言はさずに置く物かと三五郎を取こめて撃つやら蹴るやら、美登利くやしく止める人を搔きのけて、これお前がたは三ちやんに何の咎がある、正太さんと喧嘩がしたくば正太さんとしたが宜い、逃げもせねば隠くしもしない、正太さんは居ぬでは無いか、此處は私が遊び處、お前がたに指でもさゝしはせぬ、ゑゝ憎くらしい長吉め、三ちやんを何故ぶつ、あれ又引たほした、意趣があらば私をお撃ち、相手には私なる、伯母さん止めずに下されと身もだへして罵れば、何を女郎め頬桁たゝく、姉の跡つぎの乞食め、手前の相手にはこれが相應だと多人數のうしろより長吉、泥草鞋つかんで投つけければ、ねらひ違はず美登利が額際、にむさき物

したゝか、血相かへて立あがるを、怪我でもしてはと抱きとむ
 る女房、ざまを見ろ、此方には龍華寺の藤本がついて居る
 ぞ、仕かへしには何時でも来い、薄馬鹿野郎め、弱虫め、腰ぬ
 けの活地なしめ、歸りには待伏せする、横町の闇に氣をつけろ
 と三五郎を土間に投出せば、折から靴音たれやらが交番への
 注進今ぞする、それと長吉聲をかくれば丑松文次その余
 の十餘人、方角をかへてばらくと逃足はやく、※け裏の露
 路にかぐむも有るべし、口惜しいくやしい口惜しい口惜しい、長
 吉め文次め丑松め、なぜ己れを殺さぬ、殺さぬか、己れも
 三五郎だ唯死ぬものか、幽霊になつても取殺すぞ、覺えて居
 る長吉めと湯玉のやうな涙をはらく、はては大聲にわつ

と泣なき出いだす、身内みうちや痛いたからん筒袖つとそでの處ところ々々引ひさかれて背せ中なかも
 腰こしも砂すなまぶれ、止とめるにも止とめかねて勢いきほひの凄すさまじさに唯ただおどろ
 くと氣きを吞のまれし、筆ふでやの女にようぼう房はし走り寄よりて抱だきおこし、背せ中なか
 をなで砂すなを拂はらひ、堪かんにん忍にんをし、堪かんにん忍にんをし、何なんと思おもつても先さ方は
 おほぜい大おほ勢ぜい、此こつち方は皆みなよわい者ものばかり、大人おとなでさへ手てが出だしかねたに
 叶かなはぬは知しれて居ゐる、夫それでも怪け我がのなは仕し合あはせ、此この上うへは途と
 中ちゆうの待まちぶせが危あぶない、幸さいひの巡おまわり査ささまに家うちまで見みて頂いたゞかば我われ
 々々も安あん心しん、此この通とほりの子し細さいで御ご座ざります故ゆゑと筋すぢをあら〜折をり
 からの巡しゆん査さに語かたれば、職しよく掌しようがらいざ送おくらんと手てを取とらるゝに、
 い急い〜送おくつて下くださらずとも歸かへります、一ひとり人で歸かへりますと小ちいさく
 成なるに、こりや怕こわい事ことは無ない、其そ方ちら家うちまで送おくる分ぶんの事こと、心しん配ぱい

するなど微笑びしょうを含ふくんで頭つむりを撫なでらるゝに彌いよ々々ちゞみて、喧けん嘩わをしたと言いふと親父とつさんに叱しかられます、頭かしらの家うちは大屋おほやさんで御座ござりますからとて凋しほれるをすかして、さらば門かど口ぐちまで送おくつて遣やる、叱しからるゝやうの事ことは爲せぬわとて連つれらるゝに四隣あたりの人ひと胸むねを撫なでゝはるかに見送みおくれば、何なにとかしけん横町よこてうの角かどにて巡じゆん査さの手てをば振ふりはなして一目散もくさんに逃にげぬ。

(六)

めづらしい事こと、此この炎天えんてんに雪ゆきが降ふりはせぬか、美登利みどりが學がく校かうを嫌いやがるはよくゝの不機嫌ふきげん、朝飯あさはんがすゝまずば後刻のちかたに鮎やすけで

も誂へようか、風邪にしては熱も無ければ大方きのふの疲れと
 見える、太郎様への朝参りは母さんが代理してやれば御免こ
 ふむれとありしに、いゑく姉さんの繁昌するやうにと私が
 願をかけたのなれば、参らねば氣が濟まぬ、お賽錢下され行つ
 て來ますと家を驅け出して、中田圃の稻荷に鰐口ならして手
 を合せ、願ひは何ぞ行きも歸りも首うなだれて畔道づたひ歸り
 來る美登利が姿、それと見て遠くより聲をかけ、正太はかけ寄
 りて袂を押し、美登利さん昨夕は御免よと突然にあやまれば、
 何もお前に謝罪られる事は無い。夫れでも己れが憎くまれて、己
 れが喧嘩の相手だもの、お祖母さんが呼びにさへ來なければ歸
 りはしない、そんなに無暗に三五郎をも撃たしはしなかつた物を、

今朝三五郎の處へ見に行つたら、彼奴も泣いて口惜しがつた、己
 れは聞いてさへ口惜しい、お前の顔へ長吉め草履を投げたと
 言ふでは無いか、彼の野郎亂暴にもほどがある、だけれど美登
 利さん堪忍してお呉れよ、己れは知りながら逃げて居たのでは
 無い、飯を掻込んで表へ出やうとするとお祖母さんがお湯に行く
 といふ、留守居をして居るうちの騒ぎだらう、本當に知らなか
 ったのだからねと、我が罪のやうに平あやまりに謝罪て、痛みは
 せぬかと額際を見あげれば、美登利につこり笑ひて何負傷をする
 ほどでは無い、夫れだが正さん誰れが聞いても私が長吉に草
 履を投げられたと言つてはいけないよ、もし萬一お母さんが聞
 きでもすると私が叱かられるから、親でさへ頭に手はあげぬもの

を、長吉ちようきちづれが草履ざうりの泥どろを額ひたいにぬられては踏ふまれたも同じおなだ
 からとて、背そむける顔かほのいとをしく、本ほん當とに堪かん忍にんしておくれ、み
 んな己おれが悪わるい、だから謝あやまる、機嫌きげんを直なほして呉くれないか、お前まへ
おこに怒おこられると己おれが困こまるものと話はなしつれて、いつしか我家わがやの裏う
らちか近く來くれば、寄よらないか美登利みどりさん、誰だれも居ゐはしない、祖母おばあ
 さんも日ひがけを集あつめに出でたらうし、己おればかりで淋さびしくてならな
 い、いつか話はなした錦にしきゑ繪ゑを見みせるからお寄よりな、種いろく々くのがある
そでからと袖そでを捉とらへて離はなれぬに、美登利みどりは無言むごんにうなづいて、佗わび
をりどた折戸をりどの庭にはぐち口くちより入いれば、廣ひろからねども、鉢はちものをかしく並ならび
のきて、軒のきにつり忍艸しのぶ、これは正太しょうたが午うまの日ひの買物かひものと見みえぬ、理わ
け由けしらぬ人ひとは小首こくびやかたぶけん。町内てうない一の財ものもち産家ちんかといふに、家か

内ないは祖母ばばと此これ子こ二人ふたり、萬よろづの鍵かぎに下腹したはら冷ひえて留守るすは見渡みわたしの總そう長屋ながや、流石さすがに錠でうまへ前まへくたくもあらざりき、正太しょうたは先さきへあがり
 て風入かぜいりのよき場處ところを見みたて、此處こゝへ來こぬかと團扇うちわの氣きあつか
 ひ、十三こどもの子供こどもにはませ過すぎてをかし。古ふるくより持もちつたへし錦にしき
 繪ゑかずく取出とりいだし、褒ほめらるゝを嬉うれしく美登利みどりさん昔むかしの羽子はご
 板いたを見みせよう、これは己おれの母かさんがお邸やしきに奉公ほうこうして居ゑる頃ころい
 たゞいたのだとき、をかしいでは無ないか此この大おほき事こと、人ひとの顔かほも今いま
 のとは違ちがふね、あゝ此この母かさんが生いきて居ゑると宜いいが、己おれが三
 つの歳とし死しんで、お父とつさんは在あるけれど田舎いなかの實家じつかへ歸かへつて仕舞しまつた
 から今いまは祖母おばあさんばかりき、お前まへは浦山うらやましいねと無端そらに親おやの事こと
 を言いひ出だせば、それ繪ゑがぬれる、男をとこが泣なく物ものでは無ないと美登利みどりに

言はれて、己れは氣が弱いのかしら、時々種々の事を思ひ
 出すよ、まだ今時分は宜いけれど、冬の月夜なにかに田町あた
 りを集めに廻ると土手まで来て幾度も泣いた事がある、何さむい
 位で泣きはしない、何故だか自分も知らぬが種々の事を考へる
 よ、あゝ一昨年から己れも日がけの集めに廻るさ、祖母さんは年
 寄りだから其うちにも夜るは危ないし、目が悪るいから印形を
 押したり何かに不自由だからね、今まで幾人も男を使つたけれど、
 老人に子供だから馬鹿にして思ふやうには動いて呉れぬと祖母
 さんが言つて居たつけ、己れが最う少し大人に成ると質屋を出さ
 して、昔しの通りでなくとも田中屋の看板をかけると楽しみに
 して居るよ、他處の人は祖母さんを吝だと言ふけれど、己れの爲

に儉約つましくして呉くれるのだから氣きの毒どくでならない、集金あつめに行くゆくうち
 でも通新町とほりしんまちや何なにかに隨分ずいぶん可愛想かあいさうなのが有あるから、嘸さぞお祖ぼ
 母あさんを悪わるくいふだらう、夫それを考かんがへると己おれは涙なみだがこぼれる、
 やつぱ矢張きり氣よわが弱よわいのだね、今朝けさも三公こうの家うちへ取りとに行いつたら、奴やつめ
 からだ身からだ體いたが痛くせい癖おやぢに親父しに知らしすまいとして働はたらいて居ゐた、夫それを見みた
 ら己おれは口くちが利きけなかつた、男をとこが泣なくてへのは可笑をかしいでは無ない
 か、だから横町よこちょうの野蕃漢じやがたらに馬鹿ばかにされるのだと言いひかけて我わ
 が弱よわいを恥はづかしさうな顔色かほいろ、何なに心こころなく美登利みどりと見合みあす目めつ
 まの可愛かわゆさ。お前まへの祭まつりの姿なりは大層たいそうよく似合にあつて浦山うらやましかつた、
 私わたしをとこ彼あんな風ふうがして見みたい、誰だれのよりも宜よく見みえたと賞ほ
 められて、何なんだ己おれなんぞ、お前まへこそ美うつくしいや、廓内なの大卷おほまき

さんよりも奇麗きれいだと皆みんながいふよ、お前まへが姉あねであつたら己おれは何様どんな
 に肩身かたみが廣ひろかろう、何處どこへゆくにも追從ついでて行いつて大威張おほおほばりに威張ゐば
 るがな、一人ひとりも兄けうだい弟なが無ないから仕方しかたが無ない、ねへ美登利みどりさん今こ
 度んど一處しよに寫真しゃしんを取とらないか、我おれは祭まつりの時ときの姿なりで、お前まへは透す
 綾きやのあら縞しまで意氣いきな形なりをして、水道すいどう尻じりの加藤かとうでうつさう、龍華りう
 寺げの奴やつが浦山うらやましがるやうに、本當ほんたうだぜ彼奴あいつは屹度きつと怒おこるよ、眞ま
 青つさきに成なつて怒おこるよ、にゑ肝かんだからね、赤あかくはならない、夫それと
 も笑わらふかしら、笑わらはれても構かまはない、大おほきく取とつて看板かんばんに出でた
 ら宜いいな、お前まへは嫌いやかへ、嫌いやのやうな顔かほだものと恨うらめるもを
 かしく、變へんな顔かほにうつるとお前まへに嫌きららはれるからとて美登利みどりふき
 出だして、高笑たかわらひの美音びをんに御機嫌ごきげんや直なほりし。

朝冷あさすいはいつしか過ぎて日ひかげの暑あつくなるに、正太しょうたさん又また晩ばんに
 よ、私わたしの寮しやうへも遊あそびにお出いでな、燈籠とうろうながして、お魚さかな追おひます
 よ、池いけの橋はしが直なほつたれば怕こはい事ことは無ないと言いひ捨ずてに立たち出いる美登利みどり
 の姿すがた、正太しょうたうれしげに見送みおくつて美うくしと思おもひぬ。

(七)

龍華寺りうげじの信如しんによ、大黒屋だいこくやの美登利みどり、二人ふたりながら學がく校こうは育英舍いくえいしや
 なり、去さりし四月ぐわつの末すゑつかた、櫻さくらは散ちりて青葉あをばのかげに藤ふぢの花見はなみ
 といふ頃ころ、春季しゆんきの大運だいうん動どう會かいとて水みづの谷やの原はらにせし事ことありし
 が、つな引ひき、鞠まりなげ、繩なわとびの遊あそびに興きやうをそへて長ながき日ひの暮くるゝ

を忘れし、其折の事とや、信如いかにしたるか平常の沈着
わす そのをり こと しんによ へいぜい おちつき
 に似ず、池のほとりの松が根につまづきて赤土道に手をつきた
にい いけ ま ね あかつちみち て み
 れば、羽織の袂も泥に成りて見にくかりしを、居あはせたる美登
はをり たもと どろ な み み あ は せ た る み ど
 利みかねて我が紅の絹はんけちを取出し、これにてお拭きなされ
り わ く れ な い き ぬ と り い だ ふ
 と介抱をなしけるに、友達の中なる嫉妬や見つけて、藤
かいほう ともだち なか や き もち み ふ ぢ も
と ぼうず をんな は な し うれ れい を い い つ た は を か
 本は坊主のくせに女と話をして、嬉しさうに禮を言つたは可笑
ほん ぼうず の く せ に をんな と わ を し て うれ し さ う に れい を い い つ た は を か
 しいでは無いか、大方美登利さんは藤本の女房になるのであ
な おほ か た み ど り ふ ぢ も と か み さ ん
 らう、お寺の女房なら大黒さまと言ふのだなど、取沙汰しける、
てら か み さ ん だ い こ く い ふ の だ な ど と り さ た
 信如元來かゝる事を人の上に聞くも嫌ひにて、苦き顔をし
しん に よ ぐ わ ん ら い こ と ひ と う へ き き ら に て に が か ほ
 て横を向く質なれば、我が事として我慢のなるべきや、夫れより
よこ む たち わ こ と が ま ん の な る べ き や そ
 は美登利といふ名を聞くごとに恐ろしく、又あの事を言ひ出すか
み ど り な を き く こ と に お そ ろ し く ま た こ と を い ひ 出 す か

と胸むねの中なかもやくやして、何なにとも言いはれぬ厭いややな氣持きもちなり、さりな
 がら事ことごとに怒おこりつける譯わけにもゆかねば、成なるだけは知しらぬ體ていを
 して、平氣へいきをつくりて、むづかしき顔かほをして遣やり過すぎる心こころなれど、
 さし向むかひて物ものなどを問とはれたる時ときの當たう惑わくさ、大方おほかたは知しりませ
 ぬの一ことト言ことにて濟すませど、苦くるしき汗あせの身みうちながに流ながれて心こころぼそき思おも
 ひなり、美登利みどりはさる事ことも心こころにとまらねば、最はじめ初はじめは藤ふぢ本もとさん藤ふ
 ぢちもと 本もとさんと親したしく物ものいひかけ、學がく校かう退ひけての歸かへりがけに、我われ
 は一足あしはやくて道端みちばたに珍めづらしき花はななどを見みつければ、おくれし
 信しん如によを待まち合あはして、これ此こん様なうつくしい花はなが咲さいてあるに、枝えだが
 高たかくて私わたしには折をれぬ、信のぶさんは脊せいが高たかければお手てが届とどきましょよ、
 後生折ごせうつて下くだされと一なかむれの中なかにては年とし長かさなるを見みつけて頼たのめ

ば、流石さすがに信如しんによ袖そでふり切りきて行ゆきすぎる事こともならず、さりとして人ひと
 の思おもはくいよく愁つらければ、手近てぢかの枝えだを引寄ひきよせて好よし悪あしかまは
 ず申まうし譯わけばかりに折をりて、投なげつけるやうにすたすたと行過ゆきすぎる
 を、さりとは愛敬あいきやうの無なき人と惘あきれし事ことも有ありしが、度たびかさなりての
 末すゑには自ら故意おのづかわざとの意地悪いぢわるのやうに思おもはれて、人ひとには左さもなきに我わ
 れにばかり愁つらき處しうち爲をみせ、物ものを問とへば碌ろくな返事へんじした事ことなく、
 傍そばへゆけば逃にげる、はなしを爲すれば怒おこる、陰氣いんきらしい氣きのつまる、
 どうして好よいやら機嫌きげんの取とりやうも無ない、彼あのやうなこ六ろくづかし
 やは思おもひのまゝに捻ひねれて怒おこつて意地いぢはるが爲したいならんに、友ともだ
 達ちと思おもはずは口くちを利きくも入いらぬ事ことと美登利みどり少すこし瘡かんにさはりて、
 用ようの無なければ摺すれ違ちがふても物ものいふた事ことなく、途とちう中に逢あひたりとて

挨あい拶さつなど思おもひもかけず、唯ただいつとなく二人ふたりの中なかに大川おほかわ一つ横よこ
 たはりて、舟ふねも筏いかだも此處こゝには御法度ごはつと、岸きしに添そふておもひおもひの
 道みちをあるきぬ。
 祭まつりは昨日きのふに過すぎて其そのあくる日ひより美登利みどりの學がく校かうへ通かよふ事ことふつ
 と跡あとたえしは、問とふまでも無なく額ひたいの泥どろの洗あらふても消きえがたき恥ちがよ
 辱くを、身みにしみて口惜くやしければぞかし、表おもてまち町よこちやうとて横町よこちやうとて
 同おなじ教けう場じやうにおし並ならべば朋輩ほうばいに變かわりは無なき筈はずを、をかしき分わ
 け隔へだてと常日つねひごろ頃意地いちぢを持ちもち、我われは女をんなの、とても敵かなひがたき弱よ
 味わみをば付目つけめにして、まつりの夜よの處しうち爲なはいかなる卑怯ひきやうぞや、長ち
 やうやうきち吉きちのわからずやは誰たれも知しる亂暴らんぼうの上うへなしなれど、信如しんによ
 の尻しりおし無なくは彼あれほどに思おもひ切きりて表おもてまち町よこちやうをば暴あらし得えじ、人ひ

とまへ
 前をば物識らしく温順につくりて、陰に廻りて機械の糸を
 ひきしは藤本の仕業に極まりぬ、よし級は上にせよ、學は出來
 るにせよ、龍華寺さまの若旦那にせよ、大黒屋の美登利紙一
 枚のお世話にも預からぬ物を、あのやうに乞食呼はりして貰ふ恩
 は無し、龍華寺は何ほど立派な檀家ありと知らねど、我が姉さま
 三年の馴染に銀行の川様、兜町の米様もあり、議員の
 短小さま根曳して奥さまにと仰せられしを、心意氣氣に入らねば
 姉さま嫌ひてお受けはせざりしが、彼の方とても世には名高きお
 ひとやりてしゆ、嘘ならば聞いて見よ、大黒やに大
 卷の居ずば彼の樓は闇とかや、さればお店の旦那とても父さん
 か、母さん我が身をも粗略には遊ばさず、常々大切がりて床の

間にお据へなされし瀬戸物の大黒様をば、我れいつぞや坐敷の
 中にて羽根つくとして騒ぎし時、同じく並びし花瓶を仆し、散
 々に破損をさせしに、旦那次の間に御酒めし上りながら、美登
 利お轉婆が過ぎると言はれしばかり小言は無かりき、他の人な
 らば一通りの怒りでは有るまじと、女子衆達にあとくまで羨
 まれしも必竟は姉さまの威光ぞかし、我れ寮住居に人の留
 守居はしたりとも姉は大黒屋の大巻、長吉風情に負けを
 取るべき身にもあらず、龍華寺の坊さまにいちめられんは心
 外と、これより學校へ通ふ事おもしろからず、我まゝの本
 性あなどられしが口惜しさに、石筆を折り墨をすて、書物も
 十露盤も入らぬ物にして、中よき友と埒も無く遊びぬ。

(八)

走れ飛はしばせの夕ゆふべに引ひきかへて、明あけの別わかれに夢ゆめをのせ行ゆくる車まの淋び
 しさよ、帽ぼうし子しまぶかに人ひと目を厭いとふ方かた様さまもあり、手てぬぐひ拭ひとつて頬ほ
 かぶり、彼あれ女わかが別わかれに名なごり残りの一うち撃うち、いたさ身みにしみて思おもひ出だすほ
 ど嬉うれしく、うす氣き味みわるやにたにたの笑わらひ顔がほ、坂さかもと本もとへ出いでては用よ
 うじん 心たまし給たまへ千せんじゆ住ぢゆがへりの青あをものぐるま物もの車ぐるまにお足あしもと元もとあぶなし、三し島しま
 まさま 様さまの角かどまでは氣きちが違ちがひ街かい道だう、御おんかほ顔かほのしまり何いづれも緩ゆるるみて、
 はゞかりながら御おんばな鼻なの下したながく、と見みえさせ玉たまへば、そんじよ
 其そこ處ところらに夫それ大たいした御ご男なん子し様さまとて、分ぶん厘りんの價ね値うちも無なしと、辻つちに

たちて御慮外を申もありけり。楊家の娘君寵をうけてと長
 ようごんかひきいだ娘の子は何處にも貴重がるゝ頃
 恨歌を引出すまでもなく、娘の生るゝ事その例多し、築
 なれど、此あたりの裏屋より赫奕姫の生るゝ事その例多し、築
 ぎちそれやいまねうつて御前さま方の御相手、踊りに妙を得
 地の某屋に今は根を移して御前さま方の御相手、踊りに妙を得
 ゆきし雪といふ美形、唯今のお座敷にてお米のなります木はと至極
 あどけなき事は申とも、もとは此所の巻帯黨にて花がるたの内
 いしよく職せしものなり、評判は其頃に高く去るもの日々踈
 ければ、名物一つかげを消して二度目の花は紺屋の乙娘、
 い垂んぞくまちしんやごじんとう御神燈ほのめかして、小吉と呼ぶるゝ
 今千束町に新つた屋の御神燈ほのめかして、小吉と呼ぶるゝ
 こうえん公園の尤物も根生ひは同じ此處の土成し、あけくれの噂に
 公園の尤物も根生ひは同じ此處の土成し、あけくれの噂に
 も御出世といふは女に限りて、男は塵塚さがす黒斑の尾の、
 も御出世といふは女に限りて、男は塵塚さがす黒斑の尾の、

ありて用なき物とも見ゆべし、此界限に若い衆と呼ぼる、町
 並の息子、生意氣ざかりの十七八より五人組七人組、腰に尺八
 の伊達はなけれど、何とやら嚴めしき名の親分が手下につきて、
 揃ひの手ぬぐひ長提燈、賽ころ振る事おぼえぬうちは素見の
 格子先に思ひ切つての串談も言ひがたしとや、眞面目につとむ
 る我が家業は晝のうちばかり、一風呂浴びて日の暮れゆけば突か
 げ下駄に七五三の着物、何屋の店の新妓を見たか、金杉の糸屋
 が娘に似て最う一倍鼻がひくいと、頭腦の中を此様な事にこしら
 へて一軒ごとの格子に烟草の無理どり鼻紙の無心、打ちつ打た
 れつ是れを一世の譽と心得れば、堅氣の家の相續息子地廻り
 と改名して、大門際に喧嘩かひと出るもありけり、見よや

女子をんなの勢力いきほひと言いはぬばかり、春秋はるあきしらぬ五丁町てうまちの賑にぎわひ、送おく
 りの提燈かんばんいま流行はやらねど、茶屋ちやうが廻女まわしの雪駄せつたのおとに響ひびき通かよへ
 る歌かぶおんぎ音曲よくうかれうかれて入いりこ込む人の何なにを目當めあてと言こと問とはゞ、赤あか
 糸しやくまり緒熊うちかけに裌すそ襠すその裾すそながく、につと笑わらふ口くちも元目もともと、何處どこ
 が美よいとも申まをしがたけれど華魁衆おいらんしゆとて此處こゝにての敬うやまひ、立たちはなれ
 ては知しるによしなし、かゝる中なかにて朝夕あさゆふを過すごせば、衣きぬの白地しらぢ
 の紅べにに染しむ事こと無理むりならず、美登利みどりの眼めの中なかに男をとこといふ者ものさつても
こわ怕おそからず恐おそろしからず、女郎ぢやうらうといふ者ものさのみ賤いやしき勤つとめとも思おもは
 ねば、過すぎし故郷こけふを出しゆつたつ立たうじの當時たうじないて姉あねをば送おくりしこと夢ゆめ
 やうに思おもはれて、今日けふ此頃このころの全盛ぜんせいに父母ふぼへの孝養かうよううらやまし
 く、お職しよくを徹とほす姉あねが身みの、憂ういの愁つらいの数かずも知しらねば、まびとち人ひと

戀こふる鼠ねづみなき格子かうしの呪じゆもん文わか、別わかれの背せな中に手て加かげん※の秘おく密おくまで、唯ただ
 おもしろく聞きなされて、廓くるわことばを町まちにいふまで去さりとは耻はづかし
 からず思おもへるも哀あはれなり、年としはやうく數かぞへの十四しじゆ、人にんげう形だ抱だいて
 頬ほずりする心こころは御ご華くわ族ぞくのお姫ひめ様さまとて變かはりなけれど、修しう身しんの
 講こう義ぎ、家か政せい學がくのいくたても學まなびしは學がく校かうにてばかり、誠まことあけ
 くれ耳みみに入りしは好すいた好すかぬの客きやくの風ふう説せつ、仕し着きせ積つみ夜や具ぐ茶ちや屋や
 への行ゆきわたり、派は手ては美み事ごとに、かなはぬは見みすばらしく、人ひと事ごと
 我わが事こと分ぶん別べつをいふはまだ早はやし、幼おさな心こころに目めの前まへの花はなのみはしる
 く、持もちまへの負まけじ氣ぎ性せうは勝かつて馳はせ廻まわりて雲くものやうな形かたちをこし
 らへぬ、氣きちが違ちがひ街かい道だう、寢ねぼけ道みち、朝あさがへりの殿とのがた一じゆん順しゆんすみて
 朝あさ寢ねの町まちも門かどの箒はきめ目め青せい海がい波はいをゑがき、打うち水みづよきほどに濟すみ

おもてまち 表 町の通りを見渡せば、来るは来るは、萬年町山伏町、
 しんたにまち 新谷町あたりを塹にして、一能一術これも藝人の名はのがれ
 ぬ、よかく餡や軽業師、人形つかひ大神樂、住吉をど
 りに角兵衛獅子、おもひおもひの扮粧して、縮緬透綾の伊達も
 あれば、薩摩がすりの洗ひ着に黒縹子の幅狹帶、よき女もあ
 り男もあり、五人七人十人一組の大たむろもあれば、一人淋しき
 や 瘦せ老爺の破れ三味線かゝへて行くもあり、六つ五つなる女の子
 あかだすき に赤※させて、あれは紀の國おどらするも見ゆ、お顧客は廓内に
 い 居つゞけ客のなぐさみ、女郎の憂さ晴らし、彼處に入る身の生
 い 涯やめられぬ得分ありと知られて、来るも来るも此處らの町
 こま に細かしき貫ひを心に止めず、裾に海草のいかゞはしき乞食さへ

門かどには立たたず行過ゆきすぎるぞかし、容貌きりようよき女太夫をんなだゆうの笠かさにかくれぬ
 床ゆかしの頬ほを見みせながら、喉のど自慢じまん、腕うで自慢じまん、あれ彼の聲こゑを此このま
 町ちには聞きかせぬが憎にくくしと筆ふでやの女房にようぼう舌したうちして言いへば、
 店みせ先に腰こしをかけて往來ゆきを眺めし湯ゆがへりの美登利みどり、はらりと下さが
 る前まへ髪がみの毛けを黄楊つげの櫛びんぐしにちやつと搔かきあげて、伯母おばさんあ
 の太夫たゆうさん呼よんで來きませうとて、はたはた驅かけよつて袂たもとにすがり、
 投げ入いれし一品しなを誰たれにも笑わらつて告つげざりしが好このみの明あけ烏がらすさ
 らりと謠うたはせて、又御また鼻負ひいきの嬌きやう音おんこれたやすくは買かひがた
 し、彼あれが子供こどもの處業しわざかと寄より集あつまりし人舌ひとしたを卷まいて太夫たゆうよりは
 美登利みどりの顔かほを眺ながめぬ、伊達だてには通とほるほどの藝げい人にんを此處こゝにせき止と
 めて、三味さみの音ね、笛ふえの音ね、太鼓たいこの音ね、うたはせて舞まはせて人ひとの爲せ

ぬ事ことして見みたいと折をりふし正太しやうたに咄きいて聞きかせれば、驚おどろいて呆あきれて己おらは嫌いやだな。

(九)

如によぜがもん、佛説阿彌陀經ぶつせつあみだけう、聲こゑは松風まつかぜに和くわして心こゝろのちりも吹拂ふきはらはるべき御寺おんてらさま様の庫裏くりより生魚なまうをあぶる烟けふなびきて、卵塔場らんたうばに嬰兒やゝの襁褓むつきほしたるなど、お宗旨しうしによりて構かまひなき事ことなれども、法師はうしを木きのはしと心得こゝろえたる目めよりは、そゞろに腥なまぐさく覺おほゆるぞかし、龍華寺りうげじの大和尚だいおしやう身代しんだいと共に肥こへ太ふとりたる腹はらなり如何いかにも美事みごとに、色いろつやの好よきこと如何いかなる賞ほめ言葉ことばを參まゐらせたらばよか

るべき、櫻さくらいろ色いろにもあらず、緋桃ひもゝの花はなでもなし、剃そりたてたる
 頭つむりより顔かほより首筋くびすぢにいたるまで銅あかぎねいろ色の照てりに一てん點てんのにごり
 も無なく、白髪しらがもまじる太ふとき眉まゆをあげて心こころまかせの大おほ笑ほひなさるゝ
 時ときは、本堂ほんどうの如によらい來おどろさま驚おどろきて臺座だいざより轉ころび落おち給たまはんかと危あや
 ぶまるゝやうなり、御新造ごしんぞはいまだ四十うへの上いくの幾こらも越こさで、色いろ
 ろしろかみ白かみに髪けうすの毛まるまげ薄ちいく、丸ちい鬚ゆも小みさく結みひて見みぐるしからぬまでの
 人ひとがら、參詣人さんけいへも愛想あいそよく門前もんぜんの花屋はなやが口くちわ悪かる鼻かも兎角とかくの
 かげぐちみ蔭かげぐち口みを言いはぬを見みれば、着きふるしの浴衣ゆかた、總菜そうざいのお残りのこりなど
 おのずからごおんの御恩ごおんも蒙かうむるなるべし、もとは檀家だんかの一人になり成はやしが早はやく
 に良人おつとを失うしなひて寄よる邊べなき身みの暫しばらく時ときこゝにお針はりやとひ同どう様やう、
 口くちさへ濡ぬらさせて下くださらばとて洗あらひ濯そぎよりはじめさいてお菜さいごしら

へは素もとよりの事こと、墓場はかばの掃除さうぢに男衆をとこしゆの手てを助たすくるまで働はたらけば、
 和尚おしやうさま經濟けいぎより割出わりだしての御不憫ごふびんかゝり、年としは二十ちがから違ちが
 うて見みともなき事ことは女をんなも心得こころえながら、行ゆき處ところなき身みなれば結句けつく
 よき死場處しにばしよと人目ひとめを恥ぢぬやうに成なりけり、にがくしき事ことな
 れども女をんなの心こころだて悪わるるからねば檀家だんかの者ものも左さのみは咎とがめず、總そうり
 領やうの花はなといふを懐胎もうけし頃ころ、檀家だんかの中なかにも世話せわ好きずの名なある坂さかも
 本の油屋あぶらやが隠居あんきよさま仲人なかうどといふも異いな物ものなれど進すすめたて、
 表向おもてむきのものにしける、信如しんによも此この人ひとの腹はらより生うまれて男女なんによ
 二人ふたりの同胞きやうだい、一人ひとりは如法によほうの變屈へんくつものにて一日部屋いちにちべやの中なかに
 まぢくと陰氣あんきらしき生むまれなれど、姉あねのお花はなは皮薄かわうすの二重ちぢあご臑か
 わゆらしく出で來きたる子こなれば、美人びじんといふにはあらねども年頃としごろ

といひ人の評判もよく、素人にして捨て、置くは惜しい物
ひと ひやうばん
 の中に加へぬ、さりとお寺の娘に左り棲、お釋迦が三味ひく世
なか くわ てら むすめ ひだ づま しやか しやみ
 は知らず人の聞え少しは憚られて、田町の通りに葉茶屋の店を
ししひと きこ すこ はッ たまち とほ はぢや、 みせ
 奇麗にしつらへ、帳場格子のうちこのこに此娘を据へて愛敬を賣ら
きれい ちやうばかうし
 すれば、秤りの目は兎に角勘定しらずの若い者など、何がなしに
よ おほかたまいよ みせ きやく わかもの なに
 寄つて大方毎夜十二時を聞くまで店に客のかけ絶えたる事なし、
いそがしきは大和尚、貸金の取たて、店への見廻り、法用の
だいおしやう かしきん とり みせ みまわ はうよう
 あれこれ、月の幾日は説教日の定めもあり帳面くるやら經
つき いつか せつけうび さだ ちやうめん けう
 よむやら斯くては身體のつゞき難しと夕暮れの縁先に花むしろ
か からだ つゞき がた ゆふぐ ゑんさき はな
 を敷かせ、片肌ぬぎに團扇づかひしながら大盃に泡盛を
し かたはだ うちわ おほさかづき あはもり
 なみくと注がせて、さかなは好物の蒲焼を表町のむさ

し屋へあらい處をとの誂へ、承りてゆく使ひ番は信如の役なる
 に、其嫌やなること骨にしみて、路を歩くにも上を見し事なく、
 筋向ふの筆やに子供づれの聲を聞けば我が事を誂らるゝかと情
 なく、そしらぬ顔に鰻屋の門を過ぎては四邊に人目の隙をうかゞ
 ひ、立戻つて駈け入る時の心地、我身限つて腥きものは食べま
 じと思ひぬ。

父親和尚は何處までもさばけたる人にて、少しは欲深の名
 にたてども人の風説に耳をかたぶけるやうな小膽にては無く、
 手の暇あらば熊手の内職もして見やうといふ氣風なれば、霜
 月の酉には論なく門前の明地に簪の店を開き、御新造に手拭
 ひかぶらせて縁喜の宜いのをと呼ばせる趣向、はじめは恥かし

き事ことに思おもひけれど、軒のきならび素しろうと人ひとの手業てわざにて莫ばく大だいの儲もうけと聞き
 くに、此この雜沓ざつとうの中なかといひ誰たれも思おもひ寄よらぬ事ことなれば日暮ひくれより
 は目めにも立たつまじと思案しあんして、晝間ひるまは花屋はなやの女によう房ぼうに手傳てつだはせ、
 夜よに入りては自みづ身からをり立たちて呼よびたつるに、欲よくなれやいつしか恥はづか
 しきも失うせて、思おもはず聲こゑだかに負まけましよ負まけましよと趾あとを追おふやう
 に成なりぬ、人波ひとなみにのまれて買かひて眼まなこくら折をりなれば、現げん在ざい
ごせ後世ごせねがひに一おとつ昨日ひき來きたりし門もん前ぜんも忘わすれて、簪かんざし三本さんほん七十五せんと錢せんと
かけね懸直かけすれば、五本ほんついたを三錢さんならばと直切ねぎつて行ゆく、世よはぬば
たまやみもうけ玉たまの闇やみの儲もうけはこのほかにも有あるべし、信しん如によは斯かかる事ことどもいか
こゝろにも心こゝろぐるしく、よし檀家だんかの耳みみには入いらずとも近邊きんぺんの人ひと々が思おも
こどもなかまうはさはく、子こ供ども中なか間まの噂うはさにも龍華寺りうげじでは簪かんざしの店みせを出だして、信のぶさんが母か

さんの狂氣顔きちがひづらして賣つて居たなど、言はれもするやと恥かしく、
 其様な事は止しにしたが宜う御座りませうと止めし事も有りしが、
 大和尚だいおしょう大笑おほわらひに笑ひすて、黙つて居ろ、黙つて居ろ、貴様
 などが知らぬ事だわとて丸々まるく相手にしては呉れず、朝念佛あさねんぶつに
 夕勘定ゆふかんぢよう、そろばん手てにしてにこくと遊ばさるゝ顔つきは我
 親がおやながら淺ましくして、何故その頭は丸め給ひしぞと恨めしく
 も成りぬ。
 もとより元來一腹一對つゝの中に育ちて他人交ぜずの穩かなる家の内なれば、
 さして此兒を陰氣いんきものに仕立あげる種は無けれども、性來をと
 なしき上に我が言ふ事の用ひられねば兎角とかくに物のおもしろからず、
 父が仕業も母の處作も姉の教育も、悉皆しつかいあやまりのやうに思は

るれど言いふて聞きかれぬ物ものぞと諦あきらめればうら悲かなしき様やうに情なさけなく、友と
もほうばい 朋輩へんくつものは變屈いぢ者の意地いぢわると目めざせども自おのづから沈しづみ居ゐる心こゝろの底そこの
よわ 弱ことき事わ、我わが蔭かげ口くちを露つゆばかりもいふ者ものありと聞きけば、立たち出いで、
けんくわこうろん 喧嘩けんくわ口くち論ろんの勇氣ゆうきもなく、部屋へやにとぢ籠こもつて人ひとに面おもての合あはされ
おくびやうしごく ぬ憶病おくびやうしごく至極しごくの身みなりけるを、學がく校かうにての出で來きぶりといひ身み
ぶん 分ぶんがらの卑いやしからぬにつけても然さる弱虫よわむしとは知しる物ものなく、龍華寺りうげじ
ふぢもと の藤本ふぢもとは生なま煮まえの餅もちのやうに眞しんがあつて氣きに成なる奴やつと憎にくがる
あ ものも有ありけらし。

まつ 祭りの夜は田町の姉のもとへ使ひを吩附られて、更るまで我家
 かへ へ歸らざりければ、筆やの騒ぎは夢にも知らず、明日に成りて丑
 しまつぶんじ 松文次その外の口よりこれくで有つたと傳へらるゝに、今
 ちようきち 更ながら長吉の亂暴に驚けども濟みたる事なれば咎めだ
 せん するも詮なく、我が名を借りられしばかりつく／＼迷惑に思
 わ な はれて、我が爲したる事ならねど人々への氣の毒を身一つに
 やう おも せおい 背負たる様の思ひありき、長吉も少しは我が遣りそこねを恥
 おも かしう思ふかして、信如に逢はゞ小言や聞かんと其三四日は姿
 ほとぼり も見せず、やゝ餘炎のさめたる頃に信さんお前は腹を立つか知
 ととき ひようし らないけれど時の拍子だから堪忍して置いて呉んな、誰れもお
 まへしようた あきす 前正太が明巢とは知るまいでは無いか、何も女郎の一疋位相手

にして三五郎を擲りたい事も無かつたけれど、萬燈を振込んで
 見りやあ唯も歸れない、ほんの附景氣に詰らない事をしてのけ
 た、夫りやあ己れが何處までも悪るいさ、お前の命令を聞かな
 かつたは悪るからうけれど、今怒られては法なしだ、お前といふ
 後だてが有るので己らあ大舟に乗つたやうだに、見すてられち
 まつては困るだらうじや無いか、嫌やだとつても此組の大
 將で居てくんねへ、左様どぢ計は組まないからとて面目なさ、
 うに謝罪られて見れば夫れでも私は嫌やだとも言いひがたく、仕方
 が無い遣る處までやるさ、弱い者いぢめは此方の恥になるから三
 五郎や美登利を相手にしても仕方が無い、正太に末社がつい
 たら其時のこと、決して此方から手出しをしてはならないと留

めて、さのみは長吉をも叱り飛ばさねど再び喧嘩のなきやうにと祈られぬ。

罪のない子は横町の三五郎なり、思ふさまに擲かれて蹴られてその二三日は立居も苦しく、夕ぐれ毎に父親が空車を五十軒の茶屋が軒まで運ぶにさへ、三公は何うかしたか、ひどく弱つて居るやうだなと見知りの臺屋に咎められしほど成したが、父親はお辭氣の鐵として目上の人に頭をあげた事なく廓内の旦那は言はずとも、大屋様地主様いづれの御無理も御尤と受ける質なれば、長吉と喧嘩してこれこれの亂暴に逢ひましたと訴へればとて、それは何うも仕方が無い大屋さんの息子さんでは無いか、此方に理が有らうが先方が悪るからうが喧嘩の相手

に成るといふ事は無い、謝罪て來い謝罪て來い途方も無い奴だと
 わがこしをか
 我子を叱りつけて、長吉がもとへあやまりに遣られる事必
 やう
 定なれば、三五郎は口惜しさを噛みつぶして七日十日と程をふ
 いたばしよなほともその
 れば、痛みの場處の癒ると共に其うらめしさも何時しか忘れて、
 かしらいへあかぼうも
 頭の家の赤ん坊が守りをして二銭が駄賃をうれしがり、ねんく
 よ、おころりよ、と背負ひあるくさま、年はと問へば生意氣ざか
 しよ
 りの十六にも成りながら其大躰を恥かしげにもなく、表町
 そのづうたいはづ
 へものこくと出かけるに、何時も美登利と正太が鬪りものに
 なつ
 成つて、お前は性根を何處へ置いて來たとからかはれながらも
 まへしやうねどこお
 遊びの中間は外れざりき。
 あそなかまはづ
 はるさくらにぎわ
 春は櫻の賑ひよりかけて、なき玉菊が燈籠の頃、つゞいて秋
 たまぎくとうろうころあき

の新仁和賀には十分間に車の飛ぶ事此通りのみにて七十五輛と
 數へしも、二の替りさへいつしか過ぎて、赤蜻蛉田圃に亂るれ
 ば横堀に鶉なく頃も近づきぬ、朝夕の秋風身にしみ渡りて
 上清が店の蚊遣香懷爐灰に座をゆづり、石橋の田村や
 が粉挽く臼の音さびしく、角海老が時計の響きもそゞろ哀れの音
 を傳へるやうに成れば、四季絶間なき日暮里の火の光りも彼れが
 人を焼く烟りかとうら悲しく、茶屋が裏ゆく土手下の細道に落
 かゝるやうな三味の音を仰いで聞けば、仲之町藝者が冴えたる
 腕に、君が情の假寐の床にと何ならぬ一ふし哀れも深く、此時
 節より通ひ初るは浮かれ浮かるゝ遊客ならで、身にしみ／＼
 と實のあるお方のよし、遊女あがりの去る女が申き、此ほどの

事かゝんもくだくしや大音寺前にて珍らしき事は盲目按摩の
 二十ばかりなる娘、かなはぬ戀に不自由なる身を恨みて水の谷の
 池に入水したるを新らしい事とて傳へる位なもの、八百屋の吉
 五郎に大工の太吉がさつぱりと影を見せぬが何とかせしと問ふに
 この一件であげられましたと、顔の眞中へ指をさして、何の子細
 なく取立て、噂をする者もなし、大路を見渡せば罪なき子供の三
 五人手を引つれて開いらいた開いらいた何の花ひらいたと、無心の
 遊びも自然と靜かにて、廓に通ふ車の音のみ何時に變らず勇まし
 く聞えぬ。

秋雨しとく降るかと思へばさつと音して運びくる様なる淋し
 き夜、通りすがりの客をば待ため店なれば、筆やの妻は宵のほど

より表の戸をたて、中なかに集まりしは例れいの美登利みどりに正太郎しょうたろう、そ
 の外ほかには小ちいさき子供こどもの二三人にんよ寄りて細螺きしやごはじきの幼おさなげな事ことし
 て遊あそぶほどに、美登利みどりふと耳みみを立て、あれ誰たれか買物かひものに來き
 のでは無ないか溝板どぶいたを踏ふむ足音あしおとがするといへば、おや左様さうか、
 己おいらは少ちつとも聞きなかつたと正しょうた太たもちうくたこかいの手てを
 止とめて、誰だれか中なか間まが來きたのでは無ないかと嬉うれしがるに、門かどなる人ひと
 は此この店みせの前まへまで來きたりける足音あしおとの聞きこえしばかり夫それよりはふ
 つと絶たえて、音おとも沙汰さたもなし。

(十一)

正太しようたは潜りくゞを明あけて、ばあと言いひながら顔かほを出だすに、人ひとは二三
 軒先げんきの軒のき下したをたどりて、ぽつ／＼と行ゆく後うしろ影かげ、誰たれだ誰たれ
 だ、おいお這入はいりよと聲こゑをかけて、美登利みどりが足駄あしだを突つかけばきに、
 降ふる雨あめを厭いとはず驅かけ出いださんとせしが、あゝ彼奴あいつだと一ト言こと、振ふりか
 へつて、美登利みどりさん呼よんだつても來きはしないよ、一件けんだもの、と
 自分じぶんの頭つむりを丸まるめて見みせぬ。

信のぶさんかへ、と受うけて、嫌いやな坊主ぼうずつたら無ない、屹度筆きつとくでか何なにか買か
 ひに來きただけれど、私わたしたちが居あるものだから立聞たちぎきをして歸かへつ
 たのであらう、意地悪いぢわるの、根性こんせうまがりの、ひねっこびれの、
 吃どもりの、齒はかけの、嫌いやな奴やつめ、這入はいつて來きたら散さん々／＼と窘いぢめ
 てやる物ものを、歸かへつたは惜おしい事ことをした、どれ下駄げたをお貸かし、一ちよつ

と見てやる、とて正太に代つて顔を出せば軒の雨だれ前髪
 に落ちて、おゝ氣味が悪いと首を縮めながら、四五軒先の瓦斯
 燈の下を大黒傘肩にして少しうつむいて居るらしくとぼくと
 歩む信如の後かげ、何時までも、何時までも、何時までも、見
 送るに、美登利さん何うしたの、と正太は怪しがりて背中をつゝ
 きぬ。

何うもしない、と氣の無い返事をして、上へあがつて細螺を數
 へながら、本當に嫌やな小僧とつては無い、表向きに威張つ
 た喧嘩は出来もしないで、温順しさうな顔ばかりして、根
 性がくすくすして居るのだもの憎くらしからうでは無いか、家
 の母さんが言ふて居たつけ、瓦落くして居る者は心が好いのだ

と、夫それだからぐずぐずして居ゐる信のぶさん何かなには心こころが悪わるいに相違さうあない、ねへ正しようた太ささん左様さうであらう、と口くちを極きわめて信しん如によの事ことを悪わるく言いへば、夫それれでも龍華寺りうげじはまだ物ものが解わかつて居ゐるよ、長ちようきち吉きちと來きたら彼あれははやと、生意氣なまいきに大人おとなの口くちを眞ま似ねれば、お廢よしよ正しようた太ささん、子供こどもの癖くせにませた様やうでをかしい、お前まへは餘よつほど劇ひやう輕きんものだね、とて美登利みどりは正しようた太さの頬ほをつゝいて、其眞面目そのまじめがほはと笑わらひこけるに、己おらだつても最少もすこし經たてば大人おとなになるのだ、かばたや蒲田屋だんなの旦那だんなのやうに角袖かくそでぐわいとう外套なか何か着きてね、祖母おばあさんが仕舞まつて置く金時計きんどけいを貰もらつて、そして指輪ゆびわもこしらへて、巻煙まきたば草こを吸すつて、履はく物ものは何なにが宜よからうな、己おらは下駄げたより雪駄せつたが好すきだから、三枚裏まいうらにして繻珍しゆちんの鼻緒はなをといふのを履はくよ、似合にあ

くだらうかと言へば、美登利はくすく笑ひながら、背の低い人が
 角袖外套かくそでぐわいとうに雪駄せつたばき、まあ何んなにか可笑をかしからう、目めくす
 薬りの瓶びんが歩くやうであらうと誹をすに、馬鹿ばかを言つて居らあ、そ
 れまでには己おらだつて大きく成るさ、此こ様な小つぽけでは居ない
 と威張み張るに、夫それではまだ何時いつの事ことだか知れはしない、天井てんじやう
 の鼠ねづみがあれ御覽ごらん、と指ゆびをさすに、筆ふでやの女房つまを始めとして座ざにあ
 る者ものみな笑わひころげぬ。
 正太しょうたは一人眞面目ひとりまじめに成りて、例れいの目の玉たまぐるくとさせながら、
 美登利みどりさんは冗談じやうだんにして居るのだね、誰たれだつて大人おとなに成ら
 ぬ者ものは無ないに、己おらの言いふが何故なぜをかしからう、奇麗きれいな嫁よめさんを
 貰もらつて連れて歩くやうに成るのだがなあ、己おらは何なんでも奇麗きれいのが

す
 好きだから、煎餅せんべいやお福ふくのやうな痘痕みつちやづらや、薪まきやお出で
 好すきだから、煎餅せんべいやお福ふくのやうな痘痕みつちやづらや、薪まきやお出で
 額このやうなのが萬もしこ一來こようなら、直ちきさま追出おひだして家うちへは入いれて遣や
 らないや。己おいらは痘痕あばたと濕しつつかきは、大だい嫌いきらひと力ちからを入いれるに、主あ
 人るじをんなの女ふきだは吹出ふきだして、夫それでも正しようさん宜よく私わたしが店みせへ來きて下くださるの、
 伯母おばさんの痘痕あばたは見みえぬかえと笑わらふに、夫それでもお前まへは年寄としよりだ
 もの、己おいらの言いふのは嫁よめさんの事ことさ、年寄としよりは何どうでも宜いいとある
 に、夫それは大失敗おほしくじりだねと筆ふでやの女にようぼう房ぼうおもしろづくに御機嫌ごきげん
 を取とりぬ。
 町てうない内かほで顔よの好よいのは花屋はなやのお六むすむすさんに、水菓子みずぐわしやの喜きいさん、
 夫それよりも、夫それよりもずんと好よいはお前まへの隣となりに据すわつてお出いでなさ
 るのなれど、正しようた太たさんはまあ誰だれにしようと思きめてあるえ、お

六さんの眼つきか、喜いさんの清元か、まあ何れをえ、と問は
 れて、正太顔を赤くして、何だお六づらや、喜い公、何處が好
 い者かと釣りらんぷの下を少し居退きて、壁際の方へと尻込み
 をすれば、それでは美登利さんが好いのであらう、さう極めて御
 座んすの、と圖星をさゝれて、そんな事を知る物か、何だ其様な
 事、とくるり後を向いて壁の腰ばりを指でたゝきながら、廻れ
 水車を小音に唱ひ出す、美登利は衆人の細螺を集めて、
 さあ最う一度はじめからと、これは顔をも赤らめざりき。

(十二)

信如しんによが何時いつも田町たまちへ通かよふ時とき、通とほらでも事は濟すめども言いはゞ近ちかみ
 道の土手どてまへ々に、假初かりそめの格子門かうしもん、のぞけば鞍馬くらまの石燈籠いしどうろう
 に萩はぎの袖垣そでがきしをらしう見みえて、縁先ゑんさきに卷まきたる簾すだれのさまもな
 つかしう、中なかがらすの障子しょうじのうちには今いまやう様の按察あぜちの後室こうしつが
 珠數じゆずをつまぐつて、冠かぶつ切りきの若わかむらさき紫むらさきも立たちいづ出るおもやと思おもはるゝ、
 その一ツ構かまへが大黒屋だいこくやの寮りようなり。昨日きのふも今日けふも時雨しぐれの空そらに、田た
 町まちの姉あねより頼たのみの長胴着ながどうぎが出來できたれば、暫すこし時はやも早かさう重かさねさせた
 き親おや心こころ、御苦勞ごくろうでも學がく校かうまへの一寸ちよつとの間まに持もつて行いつて
 呉くれまいか、定さだめて花はなも待まつて居ゐようほどに、と母親はやおやよりの言い
 ひつけを、何なにも嫌いやとは言いひ切きられぬ温順おとなしさに、唯たゞはいゝと
 小包こづゝみを抱かへて、鼠小倉ねづみくらの緒をのすがりし林木齒ほうのきばの下駄げたひたゝ

と、信如しんによは雨傘あまがささしかぎして出ぬいで。

お齒はぐる溝どぶの角かどより曲まがりて、いつも行ゆくなる細道ほそみちをたどれば、
 運うんわるう大黒だいこくやの前まへまで來きし時とき、さつと吹ふく風かぜ大黒傘だいこくがさの上うへを
 つかみ、宙ちゆうへ引ひきあげるかと疑うたがふばかり烈はげしく吹ふけば、これは成なら
 ぬと力ちからあし足を踏ふみこたゆる途端とたん、さのみに思おもはざりし前鼻緒まへはなをの
 ずるくと※ぬけて、傘かさよりもこれこそ一の大事だいじに成なりぬ。

信如しんによこまりて舌打したうちはすれども、今いま更何さらなんと法ほうのなければ、大だ
 いこくや黒屋もんの門かきに傘よを寄せかけ、降ふる雨あめを庇ひさしに厭いとふて鼻緒はなををつくろふ
 に、常々つね／＼仕馴しなれぬお坊ぼうさまの、これは如何いかな事こと、心こころばかりは急あせれ
 ども、何なんとしても甘うまくはすげる事ことの成ならぬ口惜くやしさ、ぢれて、ぢ
 れて、袂たもとの中なかから記事文きじぶんの下書したかきして置おいた大半紙おほはんしを掴つかみ出だし、

ずん／＼と裂きて紙縷をよるに、意地わるの嵐またもや落し來て、
 立かけし傘のころと轉がり出るを、いま／＼しい奴めと腹立
 たしげにいひて、取止めんと手を延ばすに、膝へ乗せて置きし小
 づゝ、包み意久地もなく落ちて、風呂敷は泥に、我着る物の袂までを汚
 しぬ。

見るに毒の氣なるは雨の中の傘なし、途中に鼻緒を踏み切りたる
 ばかりは無し、美登利は障子の中ながら硝子ごしに遠く眺めて、
 あれ誰れか鼻緒を切つた人がある、母さん切れを遣つても宜う御
 座んすかと尋ねて、針箱の引出しから反仙ちりめんの切れ端
 をつかみ出し、庭下駄はくも鈍かしきやうに、馳せ出で、縁先の
 洋傘さすより早く、庭石の上を傳ふて急ぎ足に來たりぬ。

それと見るより美登利の顔は赤う成りて、何のやうの大事にでも逢ひしやうに、胸の動悸の早くうつを、人の見るかと背後の見られて、恐るゝ門の傍へ寄れば、信如もふつと振り返りて、此れも無言の脇を流るゝ冷汗、跣足に成りて逃げ出したき思ひなり。

平常の美登利ならば信如が難義の體を指さして、あれゝ彼の意久地なしと笑ふて笑ふて笑ひ抜いて、言ひたいまゝの悪まれ口、よくもお祭りの夜は正太さんに仇をするとて私たちが遊びの邪魔をさせ、罪も無い三ちゃんを擲かせて、お前は高見で采配を振つてお出なされたの、さあ謝罪なさんすか、何とで御座んす、私の事を女郎女郎と長吉づらに言はせるのもお前の指圖、

女郎じやうらうでも宜いいいでは無ないか、塵ちり一本ほんお前まへさんが世話せわには成ならぬ、
 私わたしには父ととさんもあり母かさんもあり、大黒屋だいくわの旦那だんなも姉あねさんもあ
 る、お前まへのやうな腥なまぐさのお世話せわには能ようならぬほどに餘計よけいな女郎じやうらう
 呼よばり置おいて貰もらひましょ、言いふ事ことがあらば陰かげのくすくすならで此
 處ゝでお言いひなされ、お相手あいてには何時いつでも成なつて見みせます、さあ
 何なんとで御座ござんす、と袂たもとを捉とらへて捲まくしかくる勢いきほひ、さこそは當あたり
 難がたうもあるべきを、物ものいはず格子かうしのかげに小隠こかくれて、さりとして立た
 去ちさるでも無なしに唯たゞうぢくと胸むねとゞるかすは平常つねの美登利みどりのさま
 にては無なかりき。

此處は大黒屋のと思ふ時より、信如は物の恐ろしく、左右を見
 ずして直あゆみに爲しなれども、生憎の雨、あやにくの風、鼻
 緒をさへに踏切りて、詮なき門下に紙縷を纏る心地、憂き事さ
 ま／＼に何うも堪へられぬ思ひの有しに、飛石の足音は背
 より冷水をかけられるが如く、顧みねども其人と思ふに、わ
 な／＼と慄へて顔の色も變るべく、後向きに成りて猶も鼻緒に
 心を盡すと見せながら、半は夢中に此下駄いつまで懸りても履け
 る様には成らんともせざりき。
 庭なる美登利はさしのぞいて、ゑゝ不器用な彼んな手つきして何
 うなる物ぞ、紙縷は婆々縷、藁しべなんぞ前壺に抱かせたとて

なが
 長もちのする事では無い、夫れ〜羽織の裾が地について泥に成
 るは御存じ無いか、あれ傘が轉がる、あれを疊んで立てかけて置
 けば好いと一々鈍かしう齒がゆくは思へども、此處に裂れが御
 座んす、此裂でおすげなされと呼かくる事もせず、これも立盡
 して降雨袖に詫しきを、厭ひもあへず小隠れて覗ひしが、さり
 とも知らぬ母の親はるかに聲を懸けて、火のしの火が熾りました
 ぞえ、此美登利さんは何を遊んで居る、雨の降るに表へ出での惡
 たづら
 戲は成りませぬ、又此間のやうに風引かうぞと呼立てられ
 るに、はい今行ますと大きく言ひて、其聲信如に聞えしを耻
 かしく、胸はわくわくと上氣して、何うでも明けられぬ門の際
 にさりとも見過しがたき難義をさま／＼の思案盡して、格子の

間あいだより手てに持もつ裂きれを物ものいはず投なげ出いだせば、見みぬやうに見みて知しら
 ず顔がほを信しん如によのつくるに、ゑ、例いつもとほの通こゝろりの心こゝろ根ねと遣やる瀬せなき思おも
 ひを眼めに集あつめて、少すこし涙なみだの恨うらみ顔がほ、何なにを憎にくんで其そのやうに無つれ情なきそ
 ぶりは見みせらるゝ、言いひたい事ことは此こなた方なたにあるを、餘あまりな人ひととこみ
 上あぐるほど思おもひに迫せまれど、母は親おやの呼よび聲こゑしばゝくなるを託わびしく、
 詮せん方かたなさに一あしト足あし二あしタ足あしゑ、何なんぞい未み練れんくさい、思おもはく耻はづか
 しと身みをかへして、かたゝと飛とび石いしを傳つたひゆくに、信しん如によは今いま
 ぞ淋さびしう見みかへれば紅べにい入り友ゆう仙ぜんの雨あめにぬれて紅もみぢ葉かたの形かたのうるは
 しきが我わがが足あしちかく散ちりほひたる、そゞろに床ゆかしき思おもひは有あれども、
 手てに取とりあぐる事ことをもせず空むなしう眺ながめて憂うき思おもひあり。
 我わが不ぶ器ぎ用ようをあきらめて、羽は織をりの紐ひもの長ながきをはづし、結ゆわひつけに

くるくと見とむなき間に合せをして、これならばと踏試る
 に、歩あるきにこといき事言ふばかりなく、此下駄このげたで田町たまちまで行く事か
 今いまさら難義なんぎは思おもへども詮せん方かたなくて立上たちあがる信如しんによ、小包こづつみを横
 に二夕足あしばかり此門このもんをはなれるにも、友仙ゆうぜんの紅葉目もみじめに残りて、
 捨すて、過すぐるにしのび難がたく心こころ残りして見返みかへれば、信のぶさん何どう
 した鼻緒はなをを切きつたのか、其姿そのなりは何どうだ、見みツとも無ないなど不意ふいに
 聲こゑを懸かくる者もののあり。
 驚おどろいて見みかへるに暴あばれ者ものの長吉ちようきち、いま廓内なよりの歸かへりと覺おぼし
 く、浴衣ゆかたを重かさねし唐棧とうげんの着物きものに柿色かきいろの三尺じやくいつもとほを例こしの通さきり腰こしの先
 にして、黒八くろの襟えりのかゝつた新あたらしい半天はんてん、印しるしの傘かさをさしかざ
 し高足たかあし駄だの爪つま皮かわも今朝けさよりはしるき漆うるしの色いろ、きわ／＼し

う見^みえて誇^{ほこ}らし氣^げなり。

僕は鼻^{はな}緒^をを切^きつて仕舞^{しま}つて何^どう爲^しようかと思^{おも}つて居^ゐる、本當^{ほんとう}に弱^{よわ}つて居^ゐるのだ、と信^{しん}如^{によ}の意^い久^く地^ぢなき事^{こと}を言^いへば、左様^{そう}だらうお前^{まへ}に鼻^{はな}緒^をの立^{たち}ツこは無^ない、好^いいや己^おれの下^げ駄^たを履^{はい}て行^ゆねへ、此^{この}鼻^な緒^をは大^{だい}丈^{ぢやう}夫^ぶだよといふに、夫^それでもお前^{まへ}が困^{こま}るだらう。何^{なに}己^おれは馴^なれた物^{もの}だ、斯^かうやつて斯^かうすると言^いひながら急^{あわ}遽^{たゞ}しう七分^ぶ三分^ぶに尻^{しり}端^{はし}折^{をり}て、其^{そん}様^な結^{ゆわ}ひつけなんぞより是^これが爽^{さつ}快^{ぱり}だど下^げ駄^たを脱^ぬぐに、お前^{まへ}跣^{はだし}に成^なるのか夫^それでは氣^きの毒^{どく}だと信^{しん}如^{よこ}ま困^きり切^きるに、好^いいよ、己^おれは馴^なれた事^{こと}だ信^のさんなんぞは足^{あし}の裏^{うら}が柔^{やわ}らかいから跣^{はだし}で石^{いし}ごろ道^{みち}は歩^{ある}けない、さあ此^これを履^はいてお出^いで、と揃^{そろ}へて出^だす親^{しん}切^{せつ}さ、人^{ひと}には疫^{やく}病^{びやう}神^{がみ}のやうに厭^{いと}は

れながらも毛虫眉毛を動かして優しき詞のもれ出るぞをかしき。
 信さんの下駄は己れが提げて行かう、臺處へ抛り込んで置たら
 子細はあるまい、さあ履き替へて夫れをお出しと世話をやき、鼻
 緒の切れしを片手に提げて、それなら信さん行てお出、後刻に學
 校で逢はうぜの約束、信如は田町の姉のもとへ、長吉
 は我家の方へと行別れるに思ひの止まる紅入の友仙は可憐し
 き姿を空しく格子門の外にと止めぬ。

(十四)

此年三の酉まで有りて中一日はつぶれしかど前後の上天氣に

おほとりじんじや にぎわ 大鳥神社の賑ひすさまじく、此處かこつけに検査場の門より
みだ 亂れ入る若人達の勢ひとては、天柱くだけ地維かくるかと思
わら はる、笑ひ聲のどよめき、中之町の通りは俄に方角の替りしや
おも うに思はれて、角町京町處々のはね橋より、さつさ
お 押せくと猪牙が、つた言葉に人波を分くる群もあり、河岸の
こみせ 小店の百嘯づりより、優にうづ高き大籬の樓上まで、
げんか 絃歌の聲のさま／＼に沸き來るやうな面白さは大方の人お
い もひ出で、忘れぬ物に思すも有るべし。正太は此日日がけの集
やす めを休ませ貰ひて、三五郎が大頭の店を見舞ふやら、團子屋
せいたか の背高が愛想氣のない汗粉やを音づれて、何うだ儲けがあるか
い えと言へば、正さんお前好い處へ來た、我れが餡この種なしに成

つて最^もう今^{いま}からは何^{なに}を賣^うらう、直^{すぐ}さまに煮^にかけては置^おいたけれど中^な
 途^{かた}お客^{きやく}は斷^{こと}れない、何^どうしような、と相^{そう}談^{だん}を懸^かけられて、智^ち惠^ゑ
 な無^なしの奴^{やつ}め大^{おほ}鍋^{なべ}の四^{ぐる}邊^りに夫^それツ^{くら}位^{むだ}無^な駄^だがついて居^ゐるでは無^ないか、
 夫^それへ湯^ゆを廻^{まわ}して砂^さ糖^{とう}さへ甘^{あま}くすれば十^に人^{まへ}前^へや二十^{にん}人^うは浮^ういて來^こ
 よう、何^{どこ}處^こでも皆^{みんな}な左^{そう}様^{よう}するのだお前^{まへ}の店^{とこ}ばかりではない、何^{なに}此^こ
 のさ^{さわ}わ騒^{さわ}ぎの中^{なか}で好^{よし}悪^{あし}を言^いふ物^{もの}が有^あらうか、お賣^うりお賣^うりと言^いひな
 がら先^{さき}に立^たつて砂^さ糖^{とう}の壺^{つぼ}を引^ひ寄^{きよ}すれば、目^めツ^つかちの母^は親^{おや}おどろ
 いた顔^{かほ}をして、お前^{まへ}さんは本^{ほん}當^{とう}に商^{あき}人^{んど}に出來^{でき}て居^ゐるな、恐^{おそ}ろ
 しい智^ち惠^ゑ者^{しや}だと賞^ほめるに、何^{なん}だ此^{こん}様^{ごと}な事^{こと}が智^ち惠^ゑ者^{しや}な物^{もの}か、今^{いま}横^{よこ}
 町^{やう}の潮^{しほ}吹^ふきの處^{とこ}で餡^{あん}が足^たりないツ^つて此^{こう}様^{よう}やつたを見^みて來^きたので
 お己^おれの發^{はつ}明^{めい}では無^ない、と言^いひ捨^すて、お前^{まへ}は知^しらないか美^み登^{どり}利^り

さんの居る處を、己れは今朝から探して居るけれど何處へ行たか
 筆やへも來ないと言ふ、廓内だらうかなと問へば、むゝ美登利さ
 んはな今の先己れの家の前を通つて揚屋町の刎橋から這入つ
 て行た、本當に正さん大變だぜ、今日はね、髪を斯ういふ風に
 こんな島田に結つてと、變てこな手つきをして、奇麗だね彼の娘
 はと鼻を拭つゝ言へば、大卷さんより猶美しいや、だけれど彼の
 子も華魁に成るのでは可憐さうだと下を向ひて正太の答ふる
 に、好いじやあ無いか華魁になれば、己れは來年から際物
 屋に成つてお金をこしらへるがね、夫れを持つて買ひに行くの
 だと頓馬を現はすに、洒落くさい事を言つて居らあ左うすればお
 前はきつと振られるよ。何故々々何故でも振られる理由が有るの

だもの、と顔を少し染めて笑ひながら、夫れじやあ己れも一廻りして來ようや、又後に來るよと捨て臺辭して門に出て、十六七の頃までは蝶よ花よと育てられ、と怪しきふるへ聲に此頃此處の流行ぶしを言つて、今では勤めが身にしみてと口の内にくり返し、例の雪駄の音たかく浮きたつ人の中に交りて小さき身躰は忽ちに隠れつ。

揉まれて出し廓の角、向ふより番頭新造のお妻と連れ立ちて話しながら來るを見れば、まがひも無き大黒屋の美登利なれども誠に頓馬の言ひつる如く、初々しき大島田結び錦のやうに絞りばなしふさくとかけて、鼈甲のさし込、總つきの花かんざしひらめかし、何時よりは極彩色のたゞ京人形を見るやう

に思はれて、正太はあつとも言はず立止まりしまゝ例の如くは
 抱きつきもせで打守るに、彼方は正太さんかとして走り寄り、
 お妻どんお前買ひ物が有らば最う此處でお別れにしましよ、私は
 このひとと一處に歸ります、左様ならとて頭を下げるに、あれ美
 ちやんの現金な、最うお送りは入りませぬとかえ、そんなら私
 は京町で買物しましよ、とちよこゝ走りに長屋の細道へ
 駆け込みに、正太はじめて美登利の袖を引いて好く似合ふね、
 いつ結つたの今朝かへ昨日かへ何故はやく見せては呉れなかつた、
 と恨めしげに甘ゆれば、美登利打しほれて口重く、姉さんの部
 屋で今朝結つて貰つたの、私は厭やでしょうが無い、とさし俯向
 きて往來を恥ぢぬ。

(十五)

憂く恥かしく、つゝましき事身にあれば人の褒めるは嘲りと聞な
 されて、嶋田の鬻のなつかしさに振かへり見る人たちをば我れを
 蔑む眼つきと察られて、正太さん私は自宅へ歸るよと言ふに、
 何故今日は遊ばないのだらう、お前何か小言を言はれたのか、大
 巻さんと喧嘩でもしたのでは無いか、と子供らしい事を問は
 れて答へは何と顔の赤むばかり、連れ立ちて團子屋の前を過ぎる
 に頓馬は店より聲をかけてお中が宜しう御座いますと仰山な言
 葉を聞くより美登利は泣きたいやうな顔つきして、正太さん一

處しよに來きては嫌いやだよと、置おきざりに一人足ひとりあしを早はやめぬ。

お西とりさまへ諸もろとも共ともにと言いひしを道引みちひきたが違がへて我わが家やの方かたへと美登みど利りの急いそぐに、お前まへ一處しよには來きて呉くれないのか、何故なぜ其方そつちへ歸かへつて仕舞しまふ、餘あんまりだぜと例れいの如ごとく甘あまへてかゝるを振切ふりきるやうに物言ものいはず行ゆけば、何なんの故ゆゑとも知しらねども正太しやうたは呆あきれて追おひすがり袖そでを止とどめては怪あやしがるに、美登利顔みどりかほのみ打うち赤あかめて、何なんでも無ない、と言いふ聲理こゑわけ由ゆあり。

寮りやうもんの門かどをばくゞり入いるに正太しやうたかねても遊あそびに來き馴なれて左さのみ遠ゑんりりよ慮いへの家いへにもあらねば、跡あとより續つづいて縁ゑん先さきからそつと上あがるを、母親は、おや見みるより、おゝ正太しやうたさん宜よく來きて下くださつた、今朝けさから美登利みどの機嫌きげんが悪わるくて皆みんななあぐねて困こまつて居ゐます、遊あそんでやつて下くだ

されと言ふに、正太は大人らしい惶りて加※が悪るいのですか
 と眞面目に問ふを、いゝゑ、と母親怪しき笑顔をして少し経て
 ば愈りませう、いつでも極りの我まゝ様、嘸お友達とも喧嘩
 しませうな、眞實やり切れぬ嬢さまではあるとて見かへるに、美
 登利はいつか小座敷に蒲團抱卷持出で、帯と上着を脱ぎ捨て
 しばかり、うつ伏し臥して物をも言はず。
 正太は恐るゝ枕もとへ寄つて、美登利さん何うしたの病氣
 なのか心持が悪いのか全體何うしたの、と左のみは摺寄ら
 ず膝に手を置いて心ばかりを脳ますに、美登利は更に答へも無く
 押ゆる袖にしのはび音の涙、まだ結ひこめぬ前髪まへがみの毛けの濡ぬれて見
 ゆるも子細ありとはしるけれど、子供心に正太は何と慰めなぐさの

ことばも出で唯ひたすらに困り入るばかり、全體何が何うしたの
 言葉も出で唯ひたすらに困り入るばかり、全體何が何うしたの
 だらう、己れはお前に怒られる事はしもしないに、何が其様なに
 腹が立つの、と覗き込んで途方にくるれば、美登利は眼を拭ふて
 しようた
 正太さん私は怒つて居るのでは有りません。
 夫れならどうしてと問はれ、ば憂き事さまさま是れは何うでも話
 しのほかの包ましきなれば、誰れに打明けいふ筋ならず、物言は
 ずして自づと頬の赤うなり、さして何とは言はれねども次第々々
 に心細き思ひ、すべて昨日の美登利の身に覺えなかりし思ひ
 をまうけて物の恥かしさ言ふばかり無く、成る事ならば薄暗き
 部屋のうち誰れとて言葉をかけもせず我が顔ながむる者なしに
 一人氣まゝの朝夕を経たや、さらば此様の憂き事ありとも人目つゝ

ましからずは斯くまで物は思ふまじ、何時までも何時までも人
 形うと紙雛好あねさまとを相手あいてにして飯事まゝごとばかりして居ゐたらば嘸さぞかし嬉うれ
 しき事ことならんを、ゑゝ厭いややく、大人おとなに成なるは厭いややな事こと、何故なぜ此
 やうに年としをば取る、最もう七月十月、一年ねんも以前もとへ歸かへりたいにと
 としより老人としよりじみた考かんがへをして、正太しょうたの此處こゝにあるをも思おもはれず、物
 いひかければ悉ことごとく蹴けちらして、歸かへつてお呉くれ正太しょうたさん、後生ごしやうだ
 から歸かへつてお呉くれ、お前まへが居ゐると私わたしは死しんで仕舞まふであらう、物
 を言いはれると頭痛づつうがする、口くちを利きくと目めがまわる、誰たれもく私わたし
 の處ところへ來きては厭いややなれば、お前まへも何卒どうぞかへ歸かへつてと例れいに似合にあはぬ愛想あいそづ
 かし、正太しょうたは何故なにとも得えぞ解ときがたく、畑はたのうちにあるやうに
 てお前まへは何どうしても變へんてこだよ、其様そのんな事ことを言いふ筈はずは無ないに、可を

怪しい人だね、と是れはいさゝか口惜しき思ひに、落ついて言ひ
 ながら目には氣弱の涙のうかぶを、何とて夫れに心を置くべき歸
 つてお呉れ、歸つてお呉れ、何時まで此處に居て呉れゝば最うお
 ともだち 朋達でも何でも無い、厭やな正太さんだと憎くらしげに言は
 れて、夫れならば歸るよ、お邪魔さまで御座いましたとて、風呂
 場に加^ば見^みる母^は親^はには挨拶もせず、ふいと立つて正太は庭
 先^はよりかけ出しぬ。

(十六)

眞一文字に驅けて人中を抜けつ潜りつ、筆屋の店へをどり込め

ば、三五郎は何時か店をば賣仕舞ふて、腹掛のかくしへ若干金
 かをぢやらつかせ、弟妹引つれつゝ好きな物をば何でも買
 への大兄様、大愉快の最中へ正太の飛込み來しなるに、や
 あ正さん今お前をば探して居たのだ、己れは今日は大分の儲けが
 ある、何か奢つて上やうかと言へば、馬鹿をいへ手前に奢つて貰
 ふ己れでは無いわ、黙つて居る生意氣は吐くなど何時になく荒ら
 い事を言つて、夫れどころでは無いとて鬱ぐに、何だ何だ喧嘩
 かと飯べかけの餡ぼんを懷中に捻ぢ込んで、相手は誰れだ、龍
 華寺か、長吉か、何處で始まつた廓内は鳥居前か、お祭り
 の時とは違ふぜ、不意でさへ無くは負けはしない、己れが承知
 だ先棒は振らあ、正さん膽ツ玉をしつかりして懸りねへ、と競

ひかゝるに、急々氣の早い奴め、喧嘩ではない、とて流石に言
 ひかねて口を噤めば、でもお前が大層らしく飛込んだから己れは
 一途に喧嘩かと思つた、だけれど正さん今夜はじまらなければ
 最う是れから喧嘩の起りッこは無いね、長吉の野郎片腕がな
 くなる物と言ふに、何故どうして片腕がなくなるのだ。お前知
 らずか己れも唯今うちの父さんが龍華寺の御新造と話して居たを
 聞いたのだが、信さんは最う近々何處かの坊さん學校へ這入
 るのだとき、衣を着て仕舞へば手が出ねへや、唐つきり彼んな袖
 のぺらくした、恐ろしい長い物を捲り上げるのだからね、左うな
 れば來年から横町も表も残らずお前の手下だよと煽すに、廢し
 て呉れ二錢貫ふと長吉の組に成るだらう、お前みたやうのが百人

なかま あつ 中間に有たとて少とも嬉しい事は無い、着きたい方へ何方へでも
 つ 着きねへ、己れは人は頼まない眞の腕ツこで一度龍華寺とやりた
 お ひと たの ほん うで
 かつたに、他處へ行かれては仕方が無い、藤本は來年學校
 そつげう しかた な ふぢもと らいねん がくかう
 を卒業してから行くのだと聞いたが、何うして其様に早く成つ
 しやう したうち どの そんな はや な
 たらう、爲様のない野郎だと舌打しながら、夫れは少しも心に
 やらう 打ちながら、夫れは少しも心に
 と 止まらねども美登利が素振のくり返されて正太は例の歌も出ず、
 みどり そぶり しょうた れい うた で
 おほち ゆき、 大路の往來の夥たゞしきさへ心 淋しければ賑やかなりとも思
 おび ことろさび にぎ おも
 はれず、火ともし頃より筆やが店に轉がりて、今日の酉の市目茶
 ひ ごころ ふで みせ ころ けふ とり いちめちや
 〃、 此處も彼處も怪しき事成りき。
 こゝ あや ことな
 みどり 美登利はかの日を始めて生れかはりし様の身の振舞、用あ
 ひ はじ うま やう み ふるまい ようあ
 をりくるわあね する折は廓の姉のもとにこそ通へ、かけても町に遊ぶ事をせず、友
 かよ かけても町に遊ぶ事をせず、友
 まち あそ こと と

もだち 達さびしがりて誘ひにと行けば今に今にと空約束はてし無く、
 さしもに中よし成けれど正太とさへに親しまず、いつも耻かし
 げに顔のみ赤めて筆やの店に手踊の活澆さは再び見るに難く
 なり成ける、人は怪しがりて病ひの故かと危ぶむも有れども母親一
 とり人ほゝ笑みては、今にお侠の本性は現れまする、これは中休み
 と子細ありげに言はれて、知らぬ者には何の事とも思はれず、女
 らしう温順しう成つたと褒めるもあれば折角の面白子を種
 なしにしたと誹るもあり、表町は俄に火の消えしやう淋しく
 な成りて正太が美音も聞く事まれに、唯夜なくの弓張提燈、
 あれば日がけの集めとしるく土手を行く影そゞろ寒げに、折ふし
 とも供する三五郎の聲のみ何時に變らず滑稽ては聞えぬ。

りようげじ 龍華寺の信如しんによが我が宗しゆうの修業しゆげうの庭にはに立たち出いづる風説うわさをも美登利みどり
 は絶たえて聞きかざりき、有ありし意地いちぢをば其そのまゝに封ふうじ込こめて、此處こゝし
 ばらくの怪あやしの現象さまに我われを我われとも思おもはれず、唯何事たゞなにごとも耻はづか
 しうのみ有ありけるに、或ある霜しもの朝水あさすいせん仙つくの作り花ばなを格子門かうしもんの外そとよ
 りさし入いれ置おきし者ものの有ありけり、誰だれの仕業しわざと知るよし無なけれど、
 美登利みどりは何ゆゑとなく懐なつかしき思おもひにて違ちがひ棚だなの一輪りんざしに入れ
 て淋さびしく清きよき姿すがたをめでけるが、聞きくともなしに傳つたへ聞きく其明そのあけの
 ひは信如しんによが何なにがしの學林がくりんに袖そでの色いろかへぬべき當たうじつ日ひなりしと
 ぞ

(終) をわり

青空文庫情報

底本：「文藝俱樂部第二卷第五編」博文館

1896（明治29）年4月

初出：（一）～（三）「文學界 二十五號」文學界雜誌社

1895（明治28）年1月30日

（四）～（六）「文學界 二十六號」文學界雜誌社

1895（明治28）年2月28日

（七）～（八）「文學界 二十七號」文學界雜誌社

1895（明治28）年3月30日

（九）～（十）「文學界 三十二號」文學界雜誌社

1895 (明治28) 年8月30日

(十一) ～ (十二) 「文學界 三十五號」文學界雜誌社

1895 (明治28) 年11月30日

(十三) ～ (十四) 「文學界 三十六號」文學界雜誌社

1895 (明治28) 年12月30日

(十五) ～ (十六) 「文學界 三十七號」文學界雜誌社

1896 (明治29) 年1月30日

※「夫《それ》」と「夫《そ》れ」、「祭《まつり》」と「祭《まつり》」の混在は、底本通りです。

※「萬燈」と「万燈」、「愛嬌」と「愛敬」、「島田」と「嶋田」、「構」と「搆」、「恥」と「耻」、「拔」と「※[#「拔」

の「友」に代えて「ノ／友」、U+39DE」の混在は、底本通りです。

※初出時の署名は、「樋口一葉女史」です。

※変体仮名は、通常の仮名で入力しました。

入力：万波通彦

校正：猫の手びい

2018年4月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

たけくらべ

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>